

鳥根の文化歴

第三集

島根の文化財

第三集



目 次

島根の先史遺跡と古墳	1頁
佐太講武貝塚	6頁
サルガ鼻洞窟住居跡	10頁
権現山洞窟住居跡	12頁
猪目洞窟遺物包含層	13頁
造山古墳	16頁
岩舟古墳	20頁
山代二子塚	22頁
山代方墳	24頁
大庭鶴塚	26頁
安部谷古墳	28頁
古天神古墳	30頁
薄井原古墳	33頁
金崎古墳群	36頁
丹花庵古墳	40頁
徳連場古墳	42頁
岩屋寺跡古墳	44頁
玉造築山古墳	46頁
今市大念寺古墳	48頁
上塙冶築山古墳	52頁
上塙冶地藏山古墳	58頁
宝塚古墳	60頁
放れ山古墳	62頁
上島古墳	65頁
周布古墳	70頁
スクモ塚古墳	72頁
鶴の鼻古墳群	74頁
参考文献	78頁
指定遺跡分布図	79頁

凡例

- 一、この図録は、昭和三十七年九月末までに國
および県が指定した鳥居原下所在の文化財
のうち、貝塚、住居跡、古墳、遺物を含め
およびその主な出土品を収録した。
- 二、図録の性質上写真に主体をおき、解説はつ
とめて平易簡潔を旨とした。
- 三、写真は本図録のため、新たに松江市井上喜
弘氏に委嘱して撮影したもののが大部分で、
一部は、東京国立博物館、京都大学考古学
研究室、大谷徳二氏提供のものである。
- 四、解説は県文化財専門委員山本清氏、同臨時
専門委員池田満雄氏、同近藤正氏、同東森
市良氏が担当した。
- 五、表紙見返し、カバーに用いた和紙は、島根
県無形文化財に指定された山陰尾葉紙（保
持者 安部栄四郎氏）である。

島根の先史遺跡と古墳

本編に収めた島根県下の文化財は、先史時代遺跡四件、古墳三件、計二六件である。このうち県の指定した文化財は二二件であつて収録したものの大部分を占める。それらは国家としての見地からその重要性を認めて指定したものであることは云うまでもないが、しかもこれらはおのずから県下における当代の文化の種相を多く象徴するものであつて、県指定の史跡と相まって地方文化を理解するかなめをなしている。よつて各指定文化財を中心とし先史並びに歴史時代文化について略説することにする。

繩文式遺跡

近年急速に研究が開拓されつつある旧石器時代乃至中石器時代に属するもれを含む無土器文化に関する遺跡は、山陰地方ではまだ発見されていない。

島根県下で柳文式土器の発見された遺跡は、出雲・石見・隱岐にれたり二〇の箇所ばかりあるが、これらのうち戦前から判明していたものは、指定史跡である。

佐太講式目塚、サルガ鼻洞窟、極現山洞窟のはか僅か一と二箇所で、大部分は戰後に発見されたものである。このようて戦後各處で遺跡が判明したのは、ここ

の方面に対する人々の関心がようやくきざし始めたことによるものであつて、實際ことはほんとうにこゝの遺跡が地下でいつてゐることを想像できる。それは

綱文式石器だけが単独に拾得された箇所は土器の出土箇所に比しはるかに多數あることによつて、どうもナガサウ。

県下の遺跡については、組織的な発掘調査が少ないため土器の編年がやや不明確であるけれども、主な遺跡の大体の年代的位置は下表に示すふうなもので

ある。すなはち數十年にわたる編文式時代において、早期木以降、県下の各地に生活のあとが残されており、ことに海上の船紋にも少くとも前期初頭以来本土と同様の文化が認められるのである。

これら遺跡の中で、指定史跡である佐太羅貝塚は今のところもつとも古い遺

跡であり、また道物包含層も広範囲に及び、各種の遺物も多く、県下の代表的遺跡であり、山陰には例の少ない貝塚で、これも重要な複数のものである。

美保關町森山のサルガ洞・櫻現山の遺跡は洞窟遺跡であるところに特徴をもつものであり、近年判明した同じ森山の小浜西墓とともに十勝石器等のほか保存良好な各種自然遺物を示している。

県下の遺跡の分布で注目されることは、海沿部と中國山脈の脊梁地帯とに遺跡が多く見られることがある。山間地帯に多いのは森林の生息良好な地帯であるといつて見方かうなずかれる。海沿部に多いのは水産物の獲物などによるものであつて、この時代の生活は自然物の採取を基調としたものと解されているのを實付けているようである。このような風は今後より多くの遺跡が発見されることにより一層明確になるであろう。

弥生式遺跡

鳥取県下で弥生式土器の出土箇所は七〇八〇箇所ほどあるが、ほかに弥生式石器の拾得された箇所もそれに劣らず多い。弥生式時代は鶴文式時代がすこぶる長期間にわたるので比すればはるかに短い期間であることを考慮すると、弥生式時代に急速に人口の増加したことが察せられる。弥生式土器の出土した遺跡も、ほとんど戰後判明したものであり、やはり米考見の遺跡がおびただしく眠つてゐることは人の想像以上であろう。種々の点から推測すると、弥生式時代末期にもなると、県下の平野に集落が形成されていたことが察せられる。

しかし、土器形式の判明している遺跡についてその分布を見ると、時期によつて差のあることが考えられる。すなはち前期の遺跡は次のように、海岸や海岸に近い低標高地帯に限られていることが注意される。

八束郡美保關町森山小浜洞窟

同 同 稲積

鹿島町 佐太羅

同 同 古瀬谷丘

松江市法吉町

同 春口町

四川津町タチヨウ

同 同 (県道沿い)

出雲市矢野町矢野貝塚

平田市舞日洞窟

簸川郡大社町原山

同 多伎村穴谷

大田市久町法尺瀬附近

鷲羽郡西郷町仁方

若狭市木部

同 安富

若狭郡西郷町後

中期前にになると「多都様田町」ふたねだなどのような山間地帯にも遺跡が認めら

れる。

弥生式文化は外來文化の強い影響の下に生まれたものであり、初期から農耕を生活の基調としたところに重要な特徴があるものとされており、遺跡分布は

以下における門葉集落發展の状態を物語るものといえる。しかし美保関町小浜、洞窟や平田町慈眼洞窟などの例は弥生時代、ことにその初期には、また自然物採取が生活上大きな比重を占めたことを示すようである。

古墳

古墳は県下にあまねく分布し、その密度は調査の精粗とも関連しきりであるが、主要な古墳は農業生产力の高い地帯に集中している。

那賀郡国府町上所出土銅鐸

熊川郡大社町命其神社山七郎丈一及び破玉舞矢玉

國朝詩

卷之三

、松江市竹矢町国分寺附近出土と伝える同地平浜八幡宮城の典型的細形鉗劍

第三回

遺跡一箇所がある。この遺跡は弥生式前期以降古墳時代後期にわたる生活と

葬葬と同者に関する遺跡と考えられる。弥生式後期の土器とともに埋葬されて

た人骨の腕に着装された貝輪は、典型的な弥生式の立派な品である。各種の

本物質の遺物が良好な保存状態で遺存したことは稀な例であり、古墳時代後期

の瓶がそのままの姿で保たれていたことなどはとくに珍らしいものである。

熙との弥生時代の坪井遺跡として注意されるものに八束郡鹿島町古浦の廻所
がござる。この遺跡は、土塁は古墳時代からとて昭和廿八年二月二十日生

関係がある。この運動は上層は支持されかねる。そこで運動はころにわたる性

スルをついたものなど多数の屈葬並びに伸展葬人骨が遺存し、全國的にも當代

左葬遺跡の著しい例である。

以下における古墳文化はこのように始まりどう展開したか。日本の古墳は、まず畿内地域において、はじめから相当大きな前方後円墳としてあらわれたも

のと考えられているが、県下における最も古い様相の古墳は、

安来市荒鳥町造山古墳——方墳、指定史跡

同 同 大成古墳——方墳

飯石郡三刀屋町松本一号墳——前方後方墳

などがあり、前期様相のものである。これらが文字通り県下最初の古墳とはい

えないが、これらから推して云えることは、この地方も畿内よりは著しく後れ

ることなく古墳があらわれたであろうということである。その年代を、通念化している年代編にしたがつて振りに云うならば、四世紀中葉乃至四世紀後半

には県下にも古墳があらわれたものとして大差はないだろう。古墳のあらわれる

ことは、それに鄰られたような有力豪族の存在を示すものであるが、その別群

品などから推して、その豪族の中央権力に対する従属關係を示唆するふうで

あり、この地方の歴史を考える上に重要な問題を含んでいる。なお古い様相の

古墳として、出雲市東林木町の大寺古墳も注意すべきものである。

中期様相の古墳は數も相当増し、分布区域が広くなり、先にあげた諸方面の
主要古墳地帯には大抵相当規模の古墳が見られるばかりでなく、少くとも中期
後半に至るとそれ以外の各地にも小規模の古墳が數多くあらわれるようである。
中期様相のおもな例をあげると、

安来市西赤字官山古墳(安来市三重敷地、消滅) 前方後方墳

松江市山代町二子塚——前方後方墳、指定史跡

同 大庭町鶴塚——方墳、同

同 古曾志前丹花庵古墳——同、同

竹矢町若船古墳——前方後方墳

同 西川津町金崎第一号墳——同、指定史跡

八束郡玉湯町玉造篠山古墳——円墳、県指定
浜田市周布古墳——前方後円墳、指定史跡
松江市スカモ塚——同、同
などがあり、観岐では海士村の郡山西古墳、西郷町青京谷古墳などもあり、また
宍道郡斐川村岩船山古墳などもこの部類である。
後期様相の古墳はもつとも数多く、各地にあるものの大部分がそれであるが
指定史跡をあげると次のようである。

八束郡玉湯町玉造篠山古墳——円墳、県指定
浜田市周布古墳——前方後円墳、指定史跡
松江市山代町弓削山古墳
出雲市今市町大念寺古墳
同 上埴治町猪山古墳
同 同 地藏山古墳
同 大草町古天神古墳(県指定)

同 下古志町宝篋古墳
同 古志町放れ山古墳(県指定)

平田市西野町上丸古墳

指定された古墳には形式上の特徴に重要性の認められたものが多いが、その
点県下、とくに出雲部の古墳にはかなり著しい地方色が見られる。すなはち〔
〕方墳と前方後方墳の多いこと 〔口石棺式石室の多いこと 〔口横口式石棺の多い
こと 〔樹根穴の多いことなどは著しい特徴である。

古墳は稀なものとされ以前に一般に知られていたのは全国で二〇余に過ぎなか
つた。そうした中で松石市篠塚などは方墳であるが故に注目され早くから学界
に知られていたが、戦後県下の調査の進むにつれて多数判明し、小形のものも
数えれば今では四、五〇基は検出されている。方墳には前述の島造山古墳など

のようには県下ではまつとも古い椎相のもの、丹花麻古埴のような中期椎相のもの、山代方墳のふるな後期のものと長い期間にわたって見られるが、確定な後期のものは余りなく、中期ころにもまつとも盛に行したもののように、小規模な中周後半乃至後期初期の椎相の古墳も多く、當時大小を通じてこの風をなしたようである。方墳とともに紀方後方墳は、松木、弓張のように前期椎相のものからうるが、松江市山代の二子塚、同竹矢舟船、安来市西赤江宮山、松江市西川津金崎第一号などは穢な中期椎相であり、松江市坂木舟井原（眞指定）、同大草占天神（眞指定）などは後期古墳であつて、ほとんど古墳時代全般開闢を通じて行われている。「前方後方墳」という埴形が式があることを最初に提起したのは、松江市山代の二子塚に関する馬鹿貯石の記述であつて、その後関東で数基判明したが、甚だ豊かな埴形とされていた。ところが戦後四五年の間に出来てこの種のものが削方後方墳と同じ位に多いことがわかつた。その後全国の名地でも前方後方墳が検出され、現今では六〇数基に及ぶといわれるが、出土で一七基も判明しているのは他に例がない。方墳とともに前方後方墳が出土が多いことは、古墳時代におけるこの地方の文化的特異的な事を示すふうである。

石棺式石室は、横口式家形石棺を拡大し、それに翼附を附加して横穴式石室を成すもので、九州に早い著例のある横口式石室に起源をもつものである。ことに人口の閉塞用石材の発掘によると出雲の横穴式石室の大多数を山東郡と鹽川郡に三例もあり、そうした系譜が認められる。石棺式石室は他地方に余りないもので出雲地方の特色とされるが、それは單に二〇基ばかりも多数あるというだけではなく、その潮流をも含めると出雲の横穴式石室の大多数を山東郡と鹽川郡に三例もあり、それが風靡しているところにこの地方の特徴ある文化相を示している。指定史跡である安来市岩舟古墳、眞指定の古天神古墳はこの種石室の好例である。

のよう興下ではもつとも古い様相のもの、丹波古墳のよう中野古墳のもの、山代古墳のうな後期のものと長い期間にわたつて見られるが、実在な後期のものは余りなく、中期ごとにもつとも盛行したもののように、小規模な中期後半乃至後期初頭の様相の古墳も多く、當時大小を通じてこの風をなしたようである。方墳とともに前方後方墳は、松木一円墳のよう前期様相のもの

次に横口式石棺は、九州に早くからあらわれていることは前に述べたが、出来て明治している家形格は三〇基ばかりあり、そのうち横口のないものは僅かで、数基に過ぎず、これまた風靡しているところが注意される。出雲市の大念寺、篠山、宝塚、地藏山等の石棺はすべて横口式である。平田市上島古墳は横口のない家形格の珍な例である。

かかるが、松江市山代の「手塚、同舟矢舟船、安芸市西赤立宮山、松江市西川津金崎第一号などは櫻花中型標柱であり、松江市坂木薄井原（眞指定）、同大草古天神（皇指社）などは後期古墳であつて、ほんと古墳時代全般を通じて行われている。「前方後方墳」という埴形式があることを最初に想起したのは、松江市山代の二子塚に関する藤原史の記述であつて、その後関東で数基判明したが、甚だ筋な埴形とされていた。ところが戦後四五年の間に出来たこの種のものが割方後古墳と同じ位に多いことがわかつた。その後全国の名地でも前古後古墳が検出され、現今では六〇数基に及ぶといわれるが、出雲で

次に横穴は九ヶ、山陰、北陸、東北等に多く分布し、畿内にも若干あるが、山陰では島根県下とよく出土と隨時に多く、ことに山陰では小規模占墳の大多数を占め、古墳時代後期に風靡している。横穴もまた種々の点から九州地方で起つたものと推定され、葬送入葬なるものが九州に多い。出云方面のものは、全国的に見て、九州のものに隨似しに入葬藝術等の多く、この点でも古墳時代後期ごろ兩者の密接な關係を示している。指定史跡である松江市大草町の安部谷の横穴群、八束郡玉湯町の岩屋寺跡の横穴群等は藝術上横穴の好例である。

は一七墓も判明しているのは他に例がない。方墳とともに前方後方墳が比較に多いことは、古墳時代におけるこの地方の文化的特徴的な要素を示すようである。石棺武石室は、横口式玄形石棺を拡大し、それに要道を附設して横穴式石室を成すもので、九州に早い著例のある横口式石棺に起源をもつものである。

ことに人口の開拓用石材の模様に福岡県・浦山古墳と密接な関連のあるものが八
東郡と熊川郡に三例もあり、そうした系譜が認められる。石棺式石室は他地方
に余りないもので出雲地方の特色とされるが、それは単に三〇基ばかりも數
あるというだけではなく、その埋没をも含めると出雲の横穴式石室の大多数を占
め、それが興味としているところにこの地方の特徴ある文化相を示している。指
定史跡である安来市岩舟古墳、鳥居指定の古天神古墳はこの種石室の好例である。
山方古墳や埴生古墳なども同種のものと見てよい。

八束郡 鹿島町
昭和八・四・一三 史指定

縄文式時代の貝塚である。宍道湖と日本海を結ぶ佐太川の両岸にまたがる冲積地を中心とする遺跡で、はじめ鶴瀬貝塚の名で知られた。佐太川の両岸一〇〇メートル位の範囲の地下に貝殻が遺存し、石器類は更に広い範囲に散布している。

遺物には、石斧、土器、骨角器の人工遺物と貝類、獸骨、しいの実等の自然遺物がある。石器は、石斧、石匕、石器・石皿・磨石等がある。石斧は一部磨製品が多く、打製石斧もある。石匕は横形のはか扁桃形無柄のものもある。石器は全て無茎で、三角形と逆剥式とあり、黒曜石製品が最も多い。石劍は同半纏の両端を打欠いたものが多數あり、石皿は径三〇センチメートル程度の多孔質玄武岩や砂岩の自然石を凹めたもので、底を草に加工したものはない。

遺跡全景





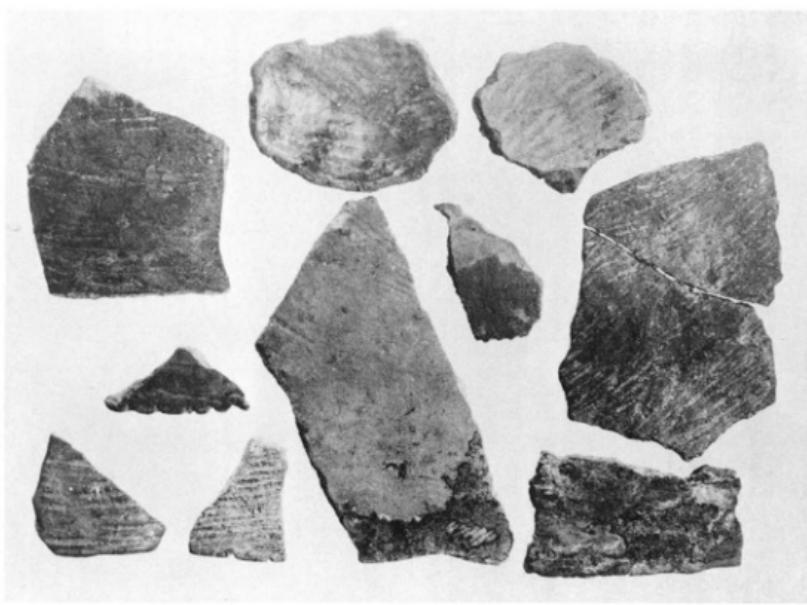
貝 層

土器は出土の層位關係は不明であるが、大別して次の
ようなものがある。(1)条痕文及び無文土器、(2)爪形文土
器、(3)彌文地土器、(4)無彌文土器、(5)擦系網格子文土
器。(1)の土器はこの貝塚の土器の主体をなし、輕い波状
口縁もあるが多くは平縁で、簡単な刻み目をつけたもの
も多い。口縁は外反氣味・直立・内收氣味など多少の差
はあるが、器底の残端に屈曲するものはない。大体單
純な形の口徑三〇センチメートル余りの深鉢が多く、底
は全て丸底である。黒味がかった色で胎土に鐵雜を含む
ものもある。この土器は早期末乃至前期初頭に位置づけ
られる。(2)の土器はわずか十數片にすぎない。土器面の
状態・厚さ・焼成・色など(1)に似ており、それに続く時
期のものであろう。(3)の土器は中期的ものはいろいろも
のが含まれ、大袋山式の特徴を持つもの、口縁を折り曲
げて密着させそこに彌文を施す江津市波子遺跡の土器に
類するもの等がある。(4)(5)はいずれも小片があるのみで
ある。以上の土器からするとこの貝塚は、彌文式早原末
に始まり前期を経て中期に至る歴史をもつているものとい
える。

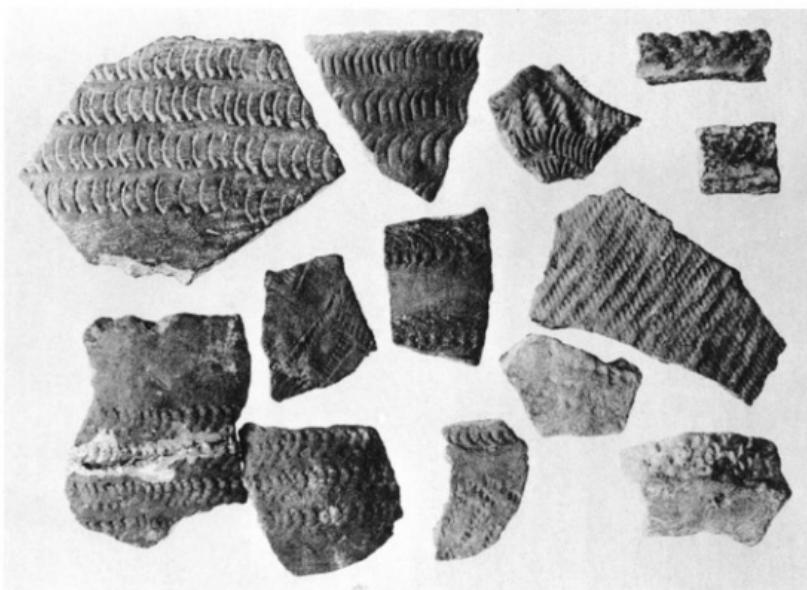
骨角器には、單純な尖頭器、牙を加工した連状品があ
り、魚鱗には牙玉のほか人頭の前頭部の骨に双孔を穿つ
たものもある。

自然遺物のうち、貝類の大部分はヤマトシジミで、少
量の海産巻貝類を含み、獸骨は猪と鹿が最も多く猪など
もある。

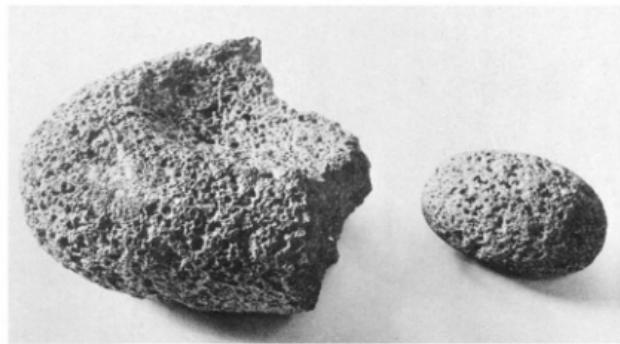
山塚には貝塚が甚だ少ないが、この漁師は相当規模の
貝塚であるため早くから広く知られ、また山塚での早い
時期の漁師で遺物も多く検出されており、現在の代表的
な彌文式遺跡である。(1)



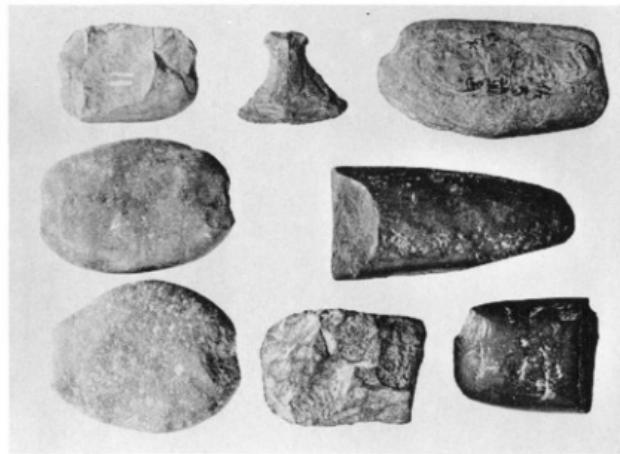
条痕文土器



爪形文・褐文地土器

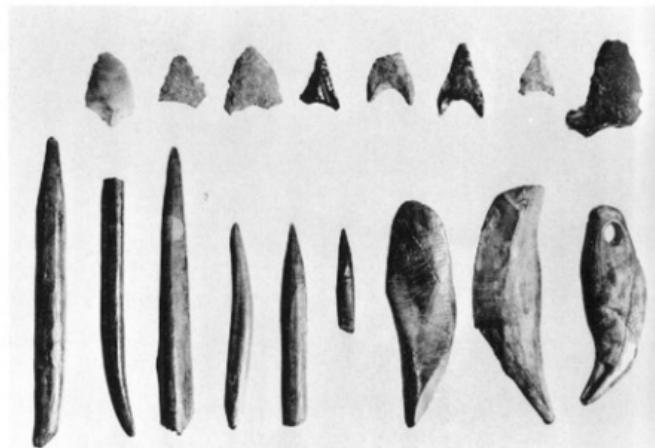


石皿・すり石



石斧・石匕・石錐

石鏃・骨器



八東郎
美保園町
昭和一八・九・八 史探定

島根半島の南側、中江の瀬戸の西方中海に面した小岬にある海蝕洞窟に當まれた縄文式遺跡である。一番北の最大のものは、奥行六〇メートル、高さ四~五メートル、幅五メートルあり、これと並んで南に四つの小洞窟がある。そのうち海水に入る最南のものを除いてすべて遺物が発見されており、古代人の生活した遺跡であることは明らかである。主な遺跡は、最も大きい洞窟の前面と入口にあり、五つ以上の層をなしその上に落成した約二メートルの包含層があつたが、戰時中軍の為に著しく削りとられた。

出土した土器は、早く知られたものは後期を主とするものであつたが中期、前期等時期的により広い巾を持つ遺跡であると考えられるようになつてゐる。後期の土器は、縄文・若浦縄文・無文や、滑形には深鉢・浅鉢・要注口土器があり、中には宋を経つたものもある。石器には、黒耀石・安山岩製の石鏟・異形石鏟・磨製石斧・石匕、刃器類(骨歯、骨頭等)や、猪の牙を加工した利器、狼の牙に穿孔したものの等がある。その他チョウセンハマグリを加工した貝殻片、匙に使用したと思われる磨いたイタヤガイが一個出土している。

尚ここで注目すべきことは第二洞窟附近に折り重つて発見された人骨であるが、出土状態から縄文式時代後期のものと考えられる。



自然遺物には鳥獸魚骨貝類がある。鳥はなべづる・のすり・かもめ、獸骨は日本鹿・猪・猫、魚はまぐろ・まふぐ・すずき・まだい、ぼら・がざみ等。貝では、バカガイ・オオノガイ・ムラサキイシコ・オキシジミ・カリガネガイ・サルボウ・イタヤガイ・ハマグリ・シオキキアシリ・アワビ・サザエ・スガイ・カワニナ・ツメタガイ・シジミ・マツバガイ・フジツボ・バイ・ムシロガイ・イボウミニナ・ウミニナ・チングニシ・アカニシ・レインがある。

佐太講武貝塚とともに遺物が豐富で、日本海岸の洞窟遺跡として



近 景

縄文式土器



権現山洞窟住居跡

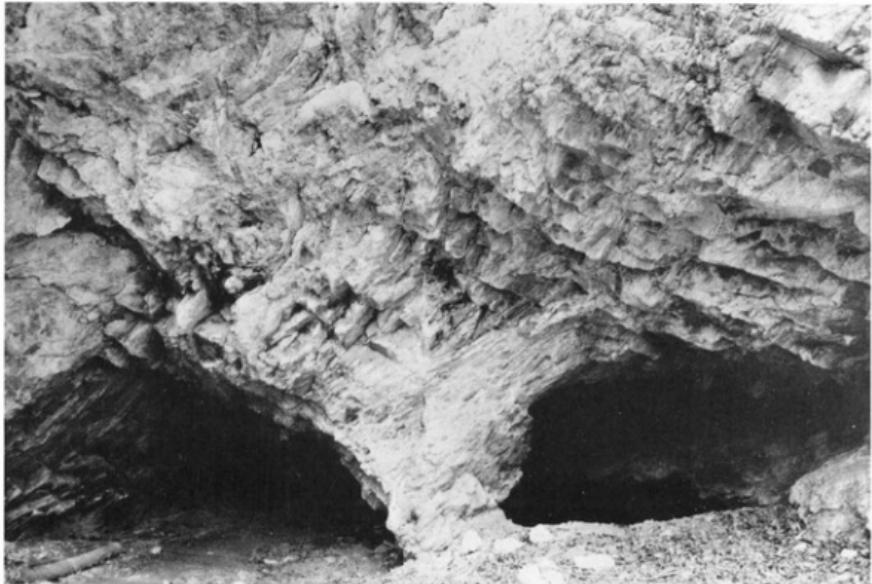
八束郡 美保関町

昭和二七・一〇・一四 史指定

サルガ鼻洞窟の北東、同じく鳥取半島の南側中江の瀬戸に面した縄文式遺跡である。森山部落の東はずれの小丘状をなす岩壁の南麓にあり、奥行約八メートル、巾約九メートル、高さ約二メートルの二つの小洞窟から成る。洞窟は奥部で結合しており、もともと海蝕によつて形成されたものであるが、現在は宅地の姿になつてゐる。洞窟内から、縄文式後期後半の土器片、石器など若干の遺物が出土した。

サルガ鼻洞窟と並んで、県下の縄文式時代の洞窟遺跡として注目される。

近 景





全 景 (昭和23年10月撮影)

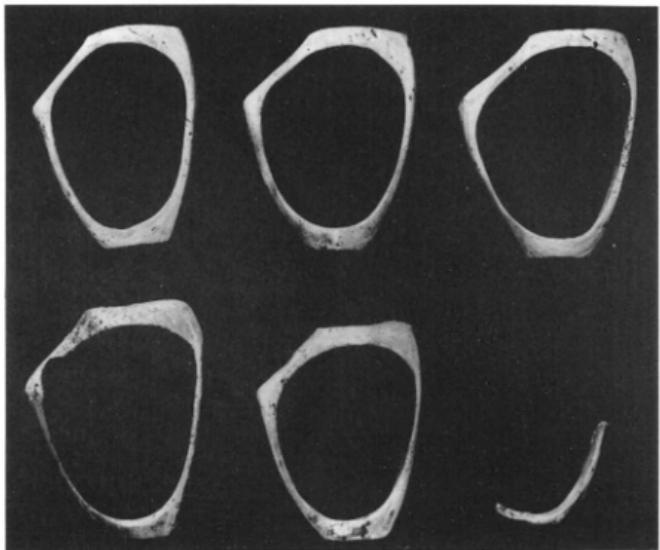
猪目洞窟遺物包含層

平田市 猪目町
昭和三二・七・二七 史指定

島根半島の北側、猪目瀬の西端に海蝕大洞窟があつて、東に向かつて開口している。昭和二三年秋、同地の漁港修築工事に際して、この洞窟内から多数の人骨・遺物が出土した。現在では遺跡の形状は相当変わっているが、遺物出土当時の状況をみると、洞窟の入口は波打際より三〇メートルの所にあり、入口の幅は約三六メートル、高さは中央部約一二メートル、奥に入るにしたがつて幅と高さとを減じ、三〇メートルほど奥で底深なせまいトンネル状となつていて。洞底の岩壁は海面よりも高くはない。洞口付近を被縫として海水抜き九メートルの推積層があり、遺物はこの中に含まれていた。

堆積層の構成物質は凝灰岩微砂・同岩の石片・石塊等が主で、洞窟の落盤および周囲から転入したものであつて、これら多くの層の中に多量の有機物その他各種遺物を含んでいた。

舊生式時代から古墳時代にかけての出土遺物は、その時代における生活および埋葬を物語っている。人骨は成人一二体以上・小兒一體以上が認められ、屈葬と仰臥葬とがある。後期舊生式土器を伴つたものは仰臥葬で、その右腕にはシ型貝類六個をはめていた。また、土器出土層の一例は、丸木舟の材を切断した三枚の板がかぶせてあり、丹彩の跡が刷印されていた。比較的上層では、岩壁に接する位置に、たがいに足をすれちがわせて正反対の方向に伸展葬されたものがあつた。そのおのおのの頭頂に接して、それぞれ須恵器の小鉢が置かれ、一方には瓶が入れてあつた。



貝輪

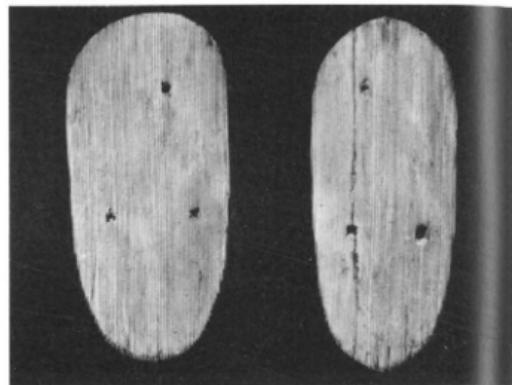


土師器

自然遺物としては、貝類・獸骨・魚骨・虫類・海藻・木実・稻・木片等が認められ、人工遺物としては、土器（弥生式土器・土師器・須惠器のほか、数個の縄文式土器小片も含む）・石器・貝輪・木器（短弓・盾・下駄・木太刀模品・木鎌・桶・杓・箸等）・鐵器（釘・鉗等）・骨角器・朱塗等が出土している。出土品は大社公民館に保管されている。
なお、この洞窟は出雲國風土記に見れる出雲郡宇賀郷の北の海底の「貢糸の穴」にあたるかもしれない。



桶



下駄



穀とそれを入れた須恵器





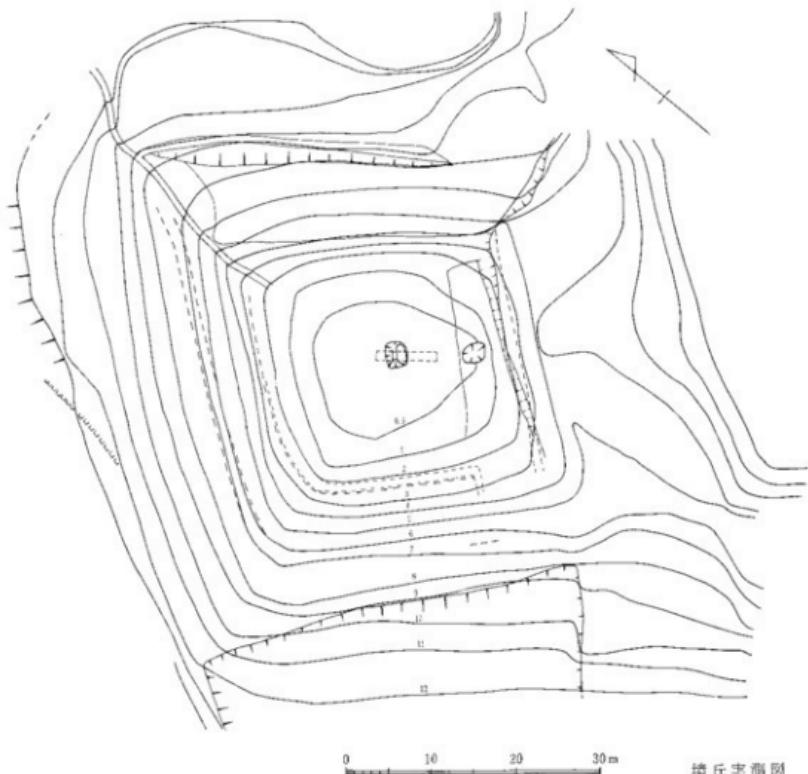
全 景

造^{つくり}
山^{やま}
古^古
墳^づ

安来市
荒島町字造山
昭和一・一二・一六
史指定

山陰本線荒島駅の西南方約一キロの丘陵上に営まれた方墳である。すなわち、中海に向つて南々西から北々東に延びる丘陵が先端近くでさらに東側に屈曲する部分の頂上に位置している。

墳丘は、丘陵の一部を切断し多少の盛り土を施したもので、その平面形はほぼ正方形を示し、北西側と東南側の対角線が南北軸と一致する。規模は、墳丘上面の辺長約三〇メートル、基底の一边は約六〇メートルである。



墳丘実測図

高さは10メートルをはかる。墳丘の斜面には、東南側を除く三邊の中間に二段をつくり、人頭大の巨石を積いている。また、最古東南側の墓石の間から十輪器の残が発見された。

内部構造は、墳丘の中央部に主軸を西北から東南において三つの細長い堅穴式石室である。墳頂中央にある第一石室は長さ七メートル、幅と高さはそれぞれ一メートルほどである。石室の四壁は扁平な滑石を小口積みにし、床面は粘土上に砂を敷き、周囲に小さな礫を置いている。床面の横断面はU字形を示す。また、石室の下方から東南側の墳頂斜面に向つて排水用の暗渠がづくられている。なお、この第一石室の両側に平行してやや小形の堅穴式石室（第二石室）がある。

第一石室からは三種二重腰帶鏡一面、刀万格鏡一面、ガラス蓋留玉二個、刀身残火などが発見された。また、第二石室からは方格鏡、四神鏡一面、碧玉銀鏡車一個、劍身、口分、刀身残火、刀子一口分などが発見され、これらは東京国立博物館に収蔵されている。

なお墳丘から壺その他土器が出土した。この古墳は石室の形態が畿内の沿岸古墳と同様な古い特色をもと、山陰では鳥取県の桶井古墳などとともに數少ない注意すべきものであり、その副葬品も古式の様相を示すもので、県下の最も古い古墳の一つである。また全周の方策の中でも古いものとして注目される。



第一石室内部



第一石室出土 方格规矩镜 (直径 17.4cm)



第一石室出土 三神三瑞纹带镜 (直径 24cm)



第二石室出土 方格规矩四神纹 (直径 19cm)

岩舟古墳

安来市
新梨町大字岩舟字村屋

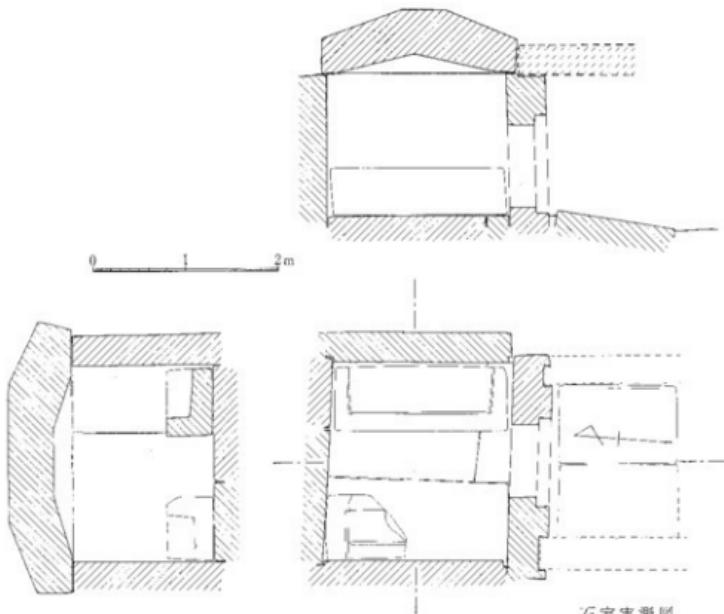
昭和二三・一二・一八 真指定

岩舟部落背後の山丘中腹に営んだ古墳で、封土は失われて石室が露出している。もと僅十余メートルの小墳であったと想われる。

石室は前後二室からなる開向きの石棺式石室で、奥室に石棺一基を置くものである。今前室は床の敷石が遺存しない。奥室は、奥壁は床の敷石が遺存しない。奥室は、奥壁を二枚、他の三壁を一枚ずつの切石で構成し、蓋石は内外とも四注式平入りの鐘形に加工し、前壁をくりぬいて方形の戸口を作り、その周囲に切りこみを施して閉塞の切石をはめる構造とする。今奥室に倒抜石棺の一つの壁を除いたような形の船身一つと同様な残欠一つと象形の蓋石一枚があるが、元は側壁に接して崩壊のない堅形石棺の形で貢かれていたのである。そして反対側にも同様の船かまたは有縁石床の形で貢かれていたものと思われる。

奥室は奥行き一・九メートル、幅二・一三メートル、高さ一・五二メートルあり、前室は幅一・六五メートルである。完存する石棺の身は内法で長さ約一・五メートル、幅五〇センチ、深さ約二七センチのものである。

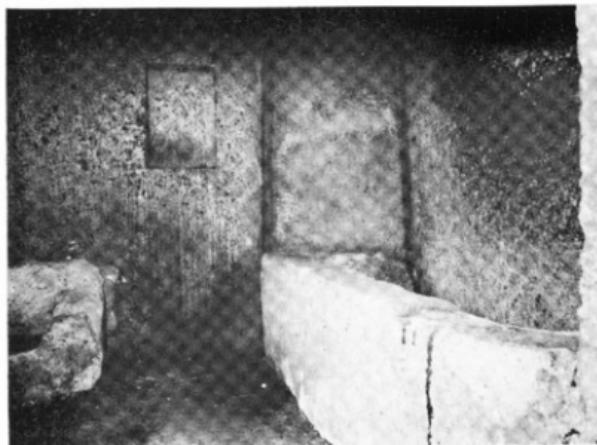
出土品についての所伝はない。横穴式石室としては小形のものであるが、堅質の石材ながら整然と入念に加工構成されており、山陰地方の古墳文化を特色づけている石棺式石室の典型的なものである。



石室実測図



石室前面



石室内部现状

山代二子塚

松江市 山代町

大正一二・一二・九 史指定

米山西城の低い台地上に築かれた前方後

方墳で、西南方の鶴塚と相対する位置にある。

この古墳は鳥取県史第四卷に前方後方墳とし

て紹介された唯一のものであるが、後方部の

後側はかつて射撃場を作った際に半分近くも

削り取られている。しかし、墳丘下部の一部

にこれに縁く漫の痕跡をとどめているので、

その原形を知ることが出来る。後方部の側方

にも丘がめぐらされていたことは北側にその

形跡のあることから明らかであるが、前方部

については不明である。埴兵は二段に築成さ

れ、長さ九〇メートル、前方部幅五〇メート

ル、高さ六・五メートル、後方部幅五四・五

メートル、高さ九メートルある。埴輪の位置

は調査されていないが、その散布状態からす

ると、後方部上面にも用いられていたことが

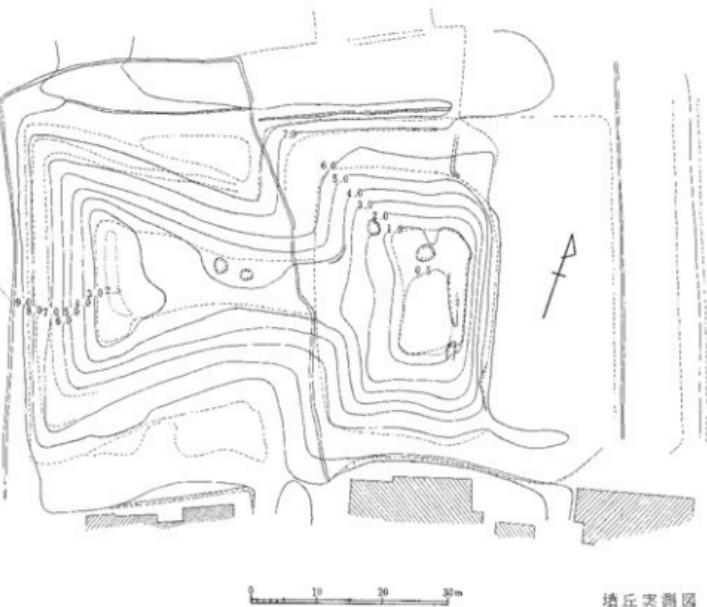
考へられる。主体構造及び遺物は、これ迄に

発見されたものはないが、立地 墳形から巾

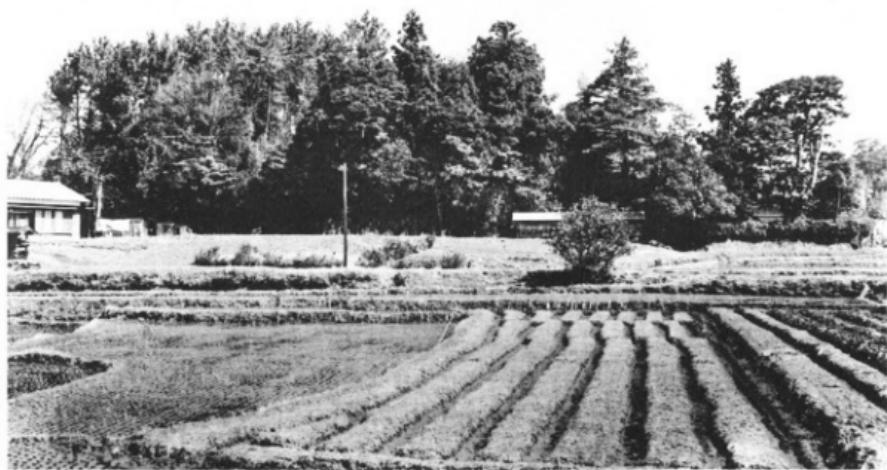
ぬの古墳と考えられる。

島根県下の別方後方墳のうちでは、形の整

つた代表的なもので、大きさの上では最大の



墳丘実測図



全 景

山代方墳

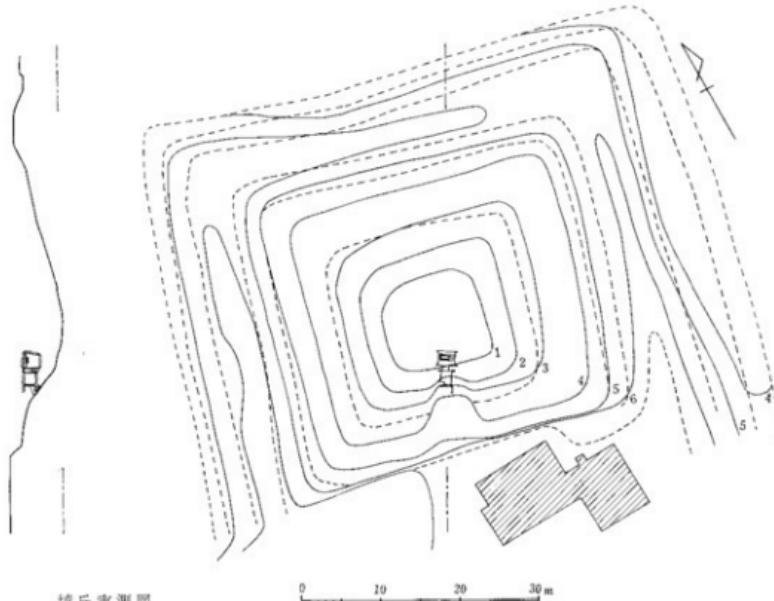
松江市 山代町

昭和一六・八・一 史蹟走

山代二子塚の北側の低い台地上に築かれた方墳で、一辺四五メートル、高さ七メートルあり、「段に築成されている。周間に幅六メートルの溝の跡があり、溝の外の土壠を加えると一辺約七〇メートルある。現在北、東、西側の土壠は現存しているが、南側は宅地となりその痕跡をとどめていない。埴輪は検出されていない。

墳丘中央部に南に開口する横穴式石室がある。石室は前奥二室よりなり、前室・奥室ともに四壁・天井をおおおの一枚の切石で造成した蓋つたものである。前室の奥行一・七メートル、幅一・二メートル、高さ約一・三メートル、奥室の奥行一・六五メートル、幅二・一メートル、高さ一・七メートルあり、前室・奥室それぞれ一枚の切石で閉塞するものである。奥室内に、枕形を刻み縁を高くし低い三脚をつけた、長さ一・九メートル、幅約〇・八メートルの石床が、破壊後存している。

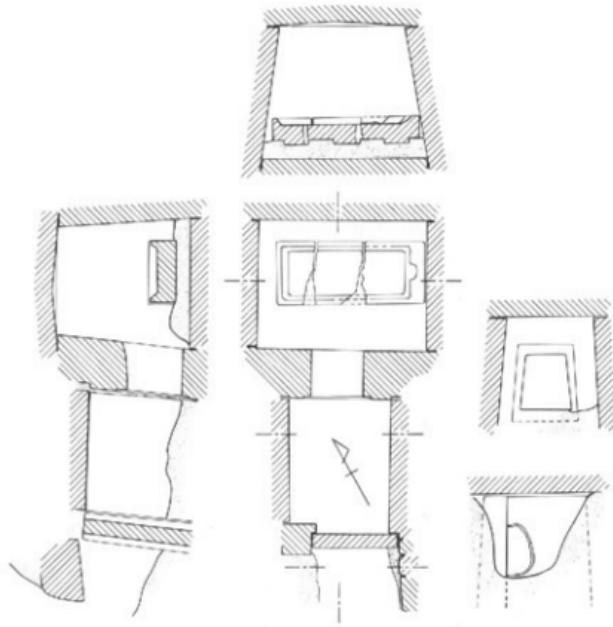
この石室の様式は、この地方に多く分布する石樋式石室（例えれば古天神古墳）や、地蔵山古墳などと近いものであつて、熊本県菊池町の穴穂古墳などとともに多くの共通点を持つものである。



墳丘実測図



全 景



石室实测图



墳丘実測図

大庭鶴塚

松江市 大庭町
大正二・一二・九 史指定

茶臼山西麓の平地に築かれた方墳である。

北方にのびる低い台地の尖端部を切断して基盤とし、その上に方形一段の墳丘を造っている。規模は一边四〇メートル、高さ約八メートルで、「一段目の高さ」二メートル、「一段目の一边」六メートル、高さ五メートルあり、西と南にそれぞれ長さ八メートル、幅二六メートル、長さ八メートル、幅二メートルの突出部がある。現在墳丘頂上東北側に四×五メートル、高さ二〇センチメートル（最高所七〇センチメートル）の高い部分がある。これは開墾前の墳丘表面をとどめているものと考えられる。南側に幅二メートルの溝の痕跡が認められ、墳丘上には埴輪円筒片が散在している。竪溝及びその形状から中型の古墳とみられている。

方形墳として早くから注意された古墳である。



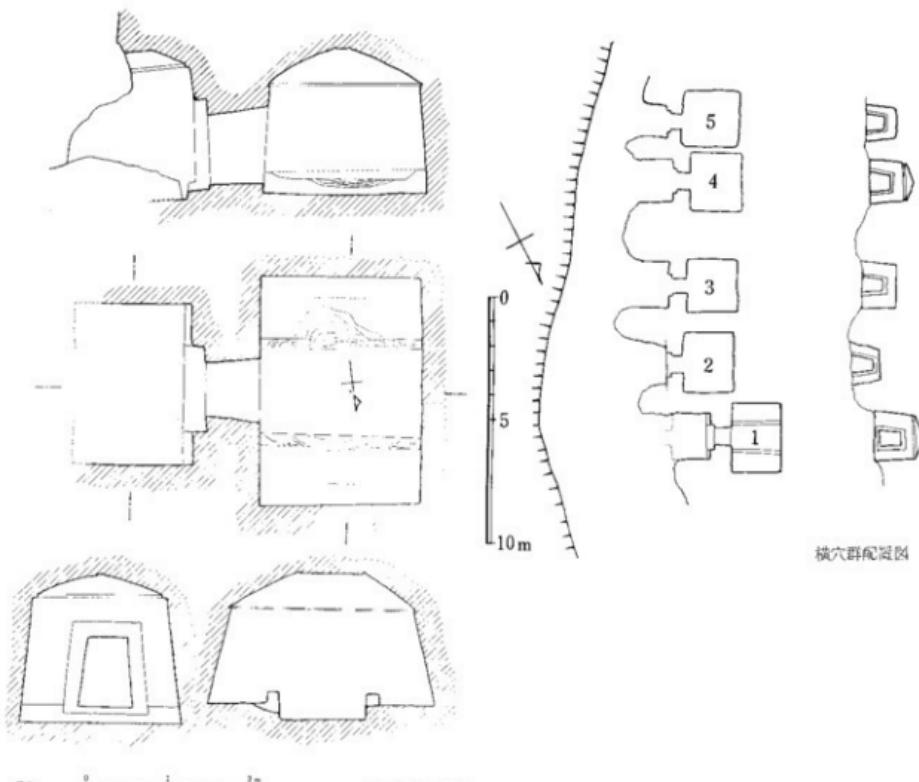
全 景

安部谷古墳（横穴）

松江市 大草町
昭和九・五・一 史指定

慈字川の南岸のなだらかな丘陵上には、夥しい数の各種古墳が群在している。安部谷古墳はその中の一群で、東面斜面の凝灰岩の岩肌に穿り込まれた極めて精巧な五つの横穴から成っている。谷口から奥に向つて「一号」、「二号」とし、その形状をみると、「一号横穴」は前・奥複室の構造を持ち、「一・二号横穴」は單室、「四号横穴」は二号横穴と同じ手法で作られている。この四穴には、いずれも玄室の左右に造り付けの有彫石床状構造がある。「一号横穴」は最も丁寧に作られ、前室奥行約一・三メートル、幅二・一メートル、奥室奥行二メートル、幅二・八メートル、高さ一・二メートルある。此型は前面が崩壊していて玄門等の構造を知り難いが、前室の天井は四注式妻入家形で奥室が平入家形を呈することにより立体的な構造の構成をなしている。この奥室の平入りと前室の妻入りの組合せは、当地方の四柱式家形横穴と同系統と解せられる石棺古石室の複雑部と玄室の構造に類似した点が多い。「五号横穴」は丸天井に近く室内は普段荒削りで、横穴を造る間に何かの理由で築造を中止した半廻の姿をとどめている。このような例は、瀬戸郡[万町]赤崎山横穴群、八束郡美保關町下南若山古墳群にもみられるもので、古墳群の築造過程を知る貴重な資料といえよう。更にこの横穴群を構成する各横穴の造りが未完の部分を除いて極めて整備され、西壁と大井の界線には突堤を施し、横の線を浮彫りとし西壁も正確に測定する等極めて入念に造作されたのである。このような整美入念な横穴は山陰の主要古墳地帯に見られ、安部谷のはか大草町有、佐原町荒神谷などところにその附近に多い。安部谷の横穴はそれらの代表的なものである。

古くから開口していて出土品は不明である。



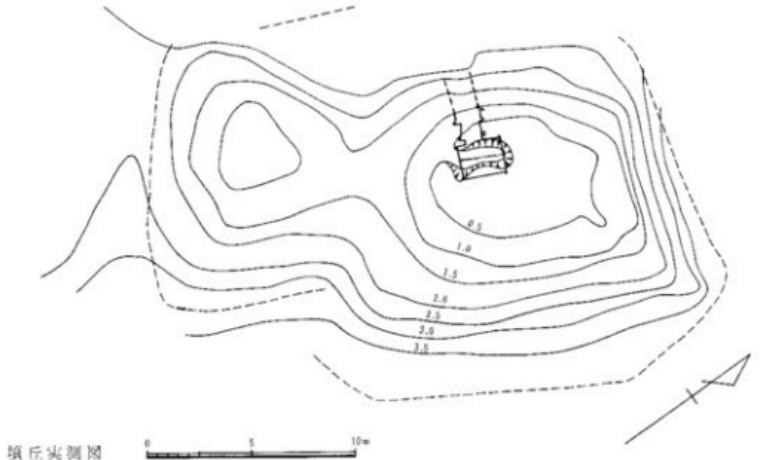
第一号穴実測図



第一号洞

第一号穴前面





填丘実測図

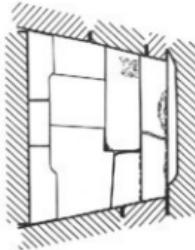
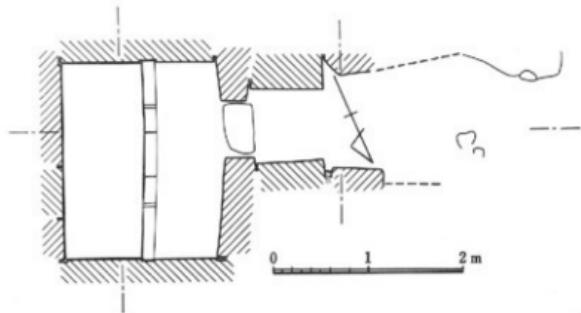
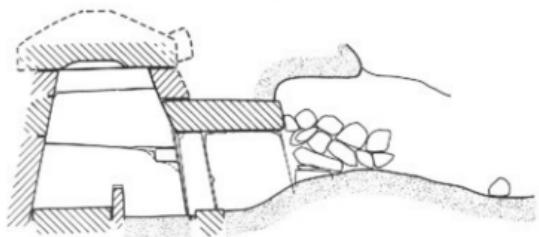
古天神古墳

松江市 大原町
昭和三五・九・二〇 県史指定

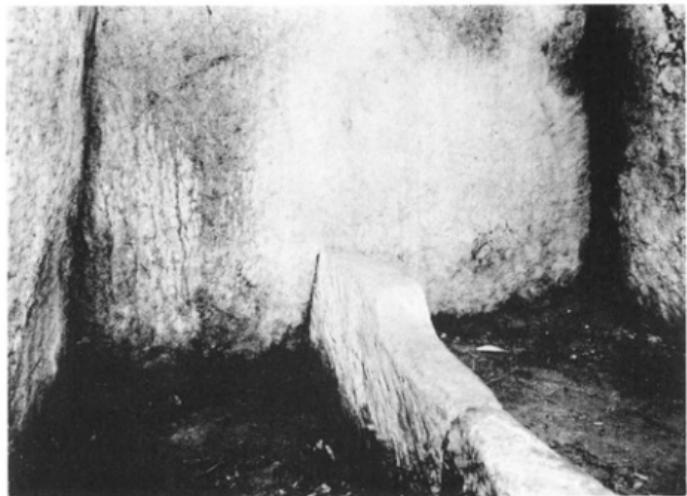
宍道山流域の水田地帶の両方につらなる山の尾根筋で、比高五〇メートルばかりの高い所にある。墳丘はやいびつな形をしているけれども、長さ約二五メートル、後方部の高さ約四メートルの小形前方後方墳であつて、埴輪も認められる。

内部構造は石棺式石室である。切石で横口のある家形石棺状の石室を作り、横口の前に袋室をつけたもので、奥壁にそろそろ形のある縫を設けた石床を置く。玄室内法は幅二メートル、長さ一・六メートル、高さ一・六メートルである。蓋石の外側は屋根形に削り突起を設けている。石棺式石室としてこの地方の他のものとくらべ特に異なる所はないが、奥壁を除く他の三壁を数個の切石を重ねて作つている点は、この種石室が大体一壁を一枚石で作るのと異なつてゐる。

この古墳は天正五年に農夫によつて発掘されたといふことで、その出土品は東京国立博物館に収蔵されているが、銀鋐内頭大刀・刀身・刀子・書寫片（鐵製）・雲珠残欠三（大二面）・家形五穀鏡（一・金環二・銀環二・須恵器（有蓋圓付舟一・蓋休五・蓋环一・壺一）等がある。



石室実測図



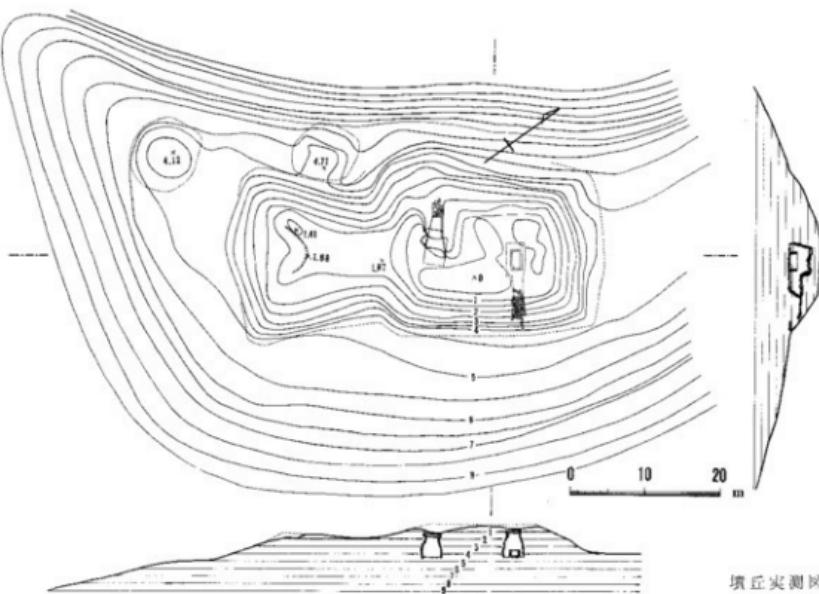
石室内部



古天神古墳出土变形五聯鏡（直径 13cm）



薄井原古墳第二号石室出土須恵器



墳丘実測図

薄井原古墳

松江市坂本町薄井原
昭和二七・六・一二 県史指定

古墳は、淡水山の南麓に発達する独立丘陵の東端に位置している。高さ約四〇メートル、附近の水田面との比高は約三〇メートルである。墳丘は、前方部を西面（南・三五度一四）に向けた前方後方墳である。

前方部の西側に接して一基、前方部西面より六メートル離れて一基の小円墳がある。いずれも径八メートル、高さ約一・五メートル前後である。陪塚であるうか。

主墳の全長は約五〇メートル、前方部は幅の長さ三〇メートル、幅二二メートルの長方形を示す。前方部は、くびれ部の幅一八メートル、先端はやや細いて二二メートルをはかる。背方は、後方部が四・五メートル、前方部はそれよりも約一・四メートル低い。埴輪、瓦石などの外周施設は認められなかつたが、前方部上面に土器器（瓦片・鉢）や須恵器（蓋・壺・壺・器）などが発見された。

内部構造は、主體とほば直交して後方部の東西両側に二つの片柱形（せんちゆうけい）横穴式石室がある。西側のものを第一号石室、東側のものを第二号石室と仮称する。石室は、それぞれ石棺を内蔵している。



遠 景

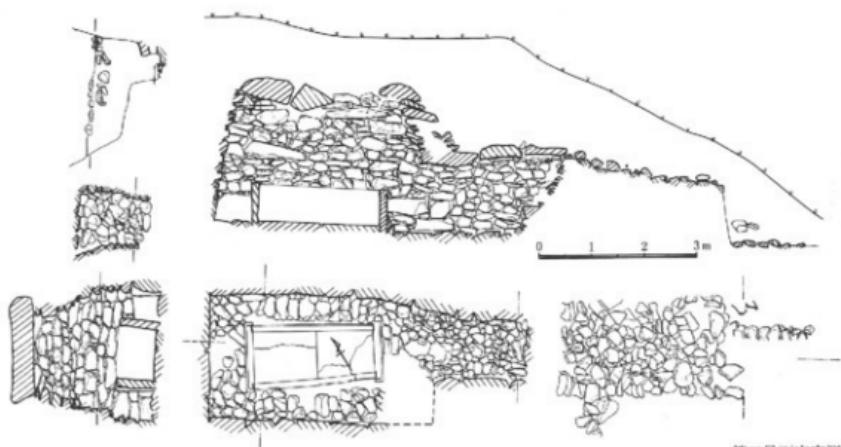
第一号石室は、すでに発掘され、半壊の状態にある。石室の全長七・六メートル、玄室の長さ三・九メートル、奥壁の幅二・六メートル、墓道部は一・六メートル。石室の壁は、基底部に大形の自然石を置き、上部に五〇×二〇センチ内外の自然石を持ち送り式に積み上げ、天井石を置いている。その高さは、玄室で二・七メートル、墓道部は一・四メートルである。床面は、大形の扁平石が敷かれている。また、石棺は蓋と側石の一端が墓道部に持ち出されている。その形式は、組合せ式家形石棺であり、蓋石の幅九〇センチ、側石の高さ五〇センチで比較的小形である。

両伴品は、玄室から鉢塚二個、墓道部から須恵器の小壺一、坏蓋二、身三個が発見された。

第二号石室は、玄室の中央に組合式箱形石棺をそなえている。石室の全長は約八メートル、玄室の長さ四・四メートル、幅は二・三×二・一メートル、高さは二・六メートルである。墓道部は、幅一・三メートル、高さは一・四メートルで、前方の八の字形に開く部分から閉塞石を充填している。石室の構造は、第一号石室と同様のものである。石棺は、砂岩の切石を用いたもので、前後に割り込みをつけた二石を立て、その両側に大小三枚の板石をはめこんでいる。床石は三枚からなり、蓋石は両側に突起のある長方形の切石を四枚並べたものである。棺の内法は、長さ二・三メートル、幅一〇〇×八〇センチ、深さは七五センチの大形の棺である。

副葬品は、玄室の西北隅に有蓋壺、陶付壺各一個、彌縫金具二個、鍔鏡一本があり、棺内にはガラス製小玉九個、直刀二口、刀子三口、鉢鏡二本、鏡一本があつた。

この古墳は、後方部に計画的に營まれた横穴式石室二個を有するものとして珍らしい例であり、また後期の前方後方墳の著例である。



第二号石室実測図



第二号石室の石棺

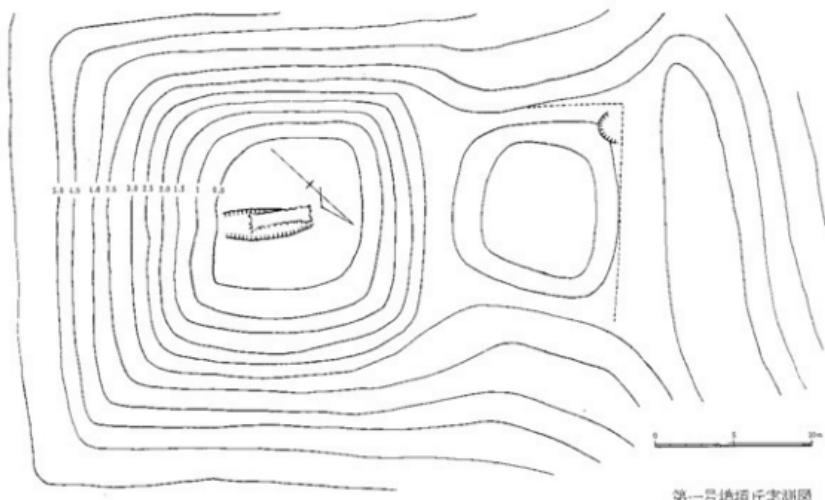


遠景

金崎古墳群

松江市 西川津町金崎
昭和三一・七・二七 史指定

島根大学の東北方にあつて、西北から東南に向かつて走る櫛溝約二〇メートルの低丘陵上に点在する古墳群である。丘陵のほぼ中央に第一号墳（前方後方墳）がその主軸を西北に向けて位置し、その東南方に約五メートルをへたてて第二号墳（幅一六メートルの円墳）があり、さらにその東南方約八メートルに第三号墳（底辺二一—二二メートルの方墳、埴輪あり）がある。次にその東南方向八〇メートル、丘陵の東南端に第四号墳（底辺二〇×二五メートルの方墳）がある。また第二号墳の北方向一〇〇メートル、丘陵の北端に近い位置に第五号墳（全長二五メートルの前方後方墳又は方墳に方形の小さい造り出しうけたもの）がある。



第一号墳丘実測図

第一号墳は昭和二年八月、柳原末治博士が鳥取考古学会会員と共に調査したのである。長さ約二六・メートル、後方部の幅約三〇メートル、前方部の幅約二四・メートル、後方部の高さ約五・五メートル、前方部の高さ約三・メートルで、後方部および前方部の頂上部はそれを平坦をなしている。後方部上面の脇辺に埴輪田舎をめぐらしだれど、前方部上面には家形埴輪および人物埴輪の残片が認められた。

第一号墳の内部構造は、後方部中央に主軸の方向に設けた割石積みの腰穴式石室で、石室は幅約一メートル、高さ約一メートル、長さ約四メートルあつて、底面は圓形を敷いている。壁石は厚さ一〇センチメートル内外の扁平なものと、二〇センチメートル内外の大形のものとが用いられ、やや斜造で半壊していた。石室内出土物には、彷彿円形花文鏡、勾玉(碧玉腰五メノウ型)、青玉(碧玉腰四、なつめ玉(碧玉腰二)、ガラス製小玉多数、滑石製玉多数、手持勾玉(滑石製二)、直刀(漆塗装)、須恵器(腰大一・同小二・長頭盃一・異形連賀小盃一・有蓋高杯一・無蓋高杯一・器台一・脚付盃二)等がある。須恵器は最も古い式に属するものである。出土品は京都市立考古学および鳥取大学に保管されている。



第一号墳出土玉類



同 上



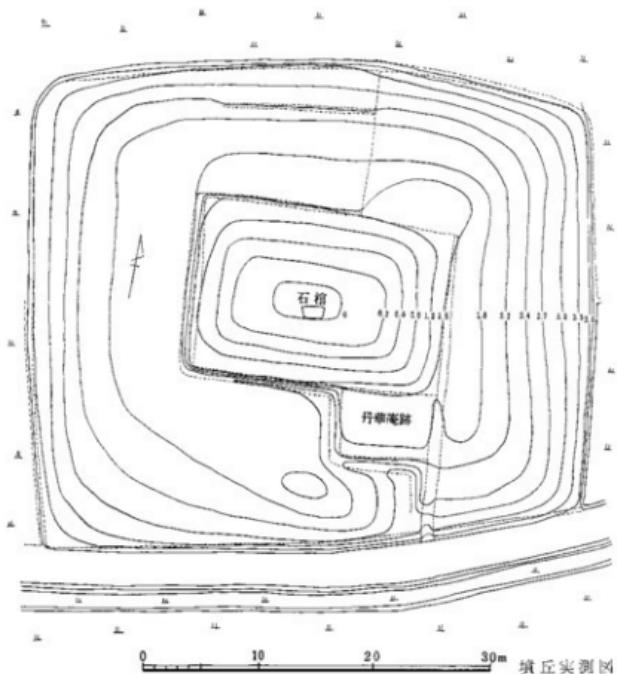
第一号填出土子持勾玉

第一号填出土須惠器



丹花庵古墳

松江市 古墳志向
昭和八・二・二八 史指定



北山山脈の支脈が大瀧湖に向つてのびるその間に形成された冲積地に築造された古墳である。開墾された畑地となり、墳形を掘じて、いるが、一边四七メートル、高さ三・五メートルの方墳で、埴輪・葺石があり、一段築成の痕跡をとどめている。

墳丘の中央部に、異特形石棺を直接土中に埋めている。石棺は、現在蓋石のみが露出しているが、底石、側石、蓋石あわせて六枚からなり、底石は長さ約二・五メートル、幅約一・二メートル、厚さ二・六センチメートルで、その周縁に長さ八センチメートル、幅二・五センチメートルの観察突起を有する。この底石の上に、長さ二・五メートル、高さ五六センチメートル、幅七六センチメートルの側石をおく。蓋石は、内外両面かまぼこ形をなし、中央部の長さ一・〇八メートル、幅一・二メートル、厚さ二・五センチメートルある。この蓋石には波打方向の突起と斜格子文とを組み合せた装飾施設が施されている。文様は、中央縱方に向かう幅二十一センチメートルの間隔がある。その両側にこれと平行し二〇センチメートルの間隔をおいて左右それぞれ対称に幅七センチメートルの実筋がある。その実筋を中心として草葉二・五センチメートル間隔の斜格子文が次々で施されている。鳥根県史によると、かつてこの蓋を取った際、石棺内には十数が流入しており、その中から側の折片・土器片を発見したといふことである。

装飾文をもつ石棺を有する古墳として注目される。



全　景



石　棺

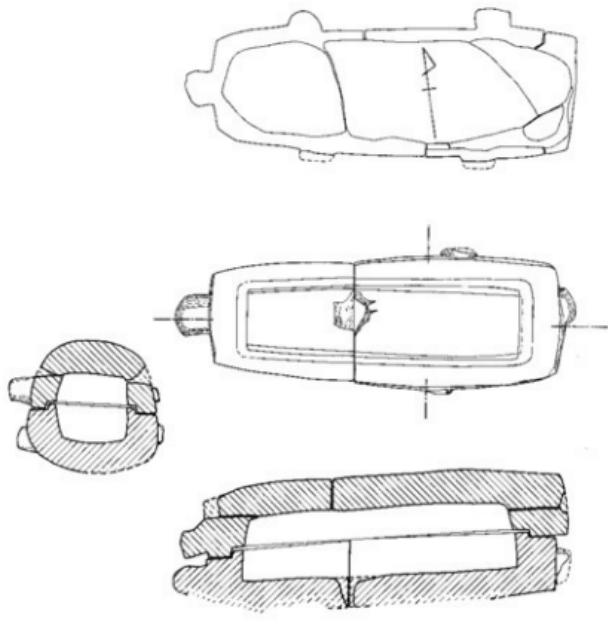
徳連場古墳

八重郡 下湯町大字下道字徳連場
昭和八・二・二八 史指定

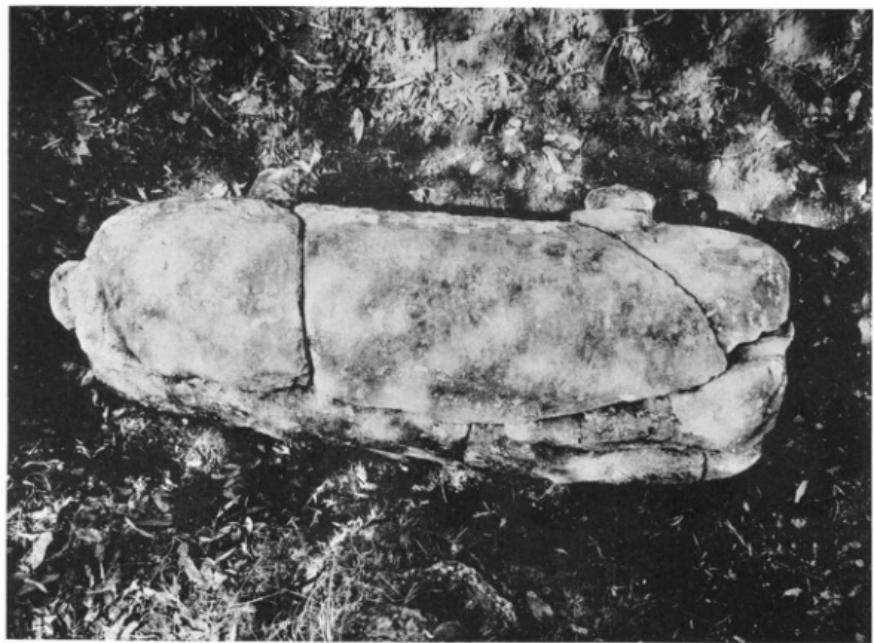
五邊圓錐の東南方の丘陵上に石棺約九〇メートルの所にある。墳丘は最大径八・五メートル、高さ一・五メートルの円墳状を示し、石棺が露出している。

石棺は、わずかに脛張りのある船竹形石棺である。蓋は、風化して分離しているが、もとは一石を割りぬいてつくられたものである。全長二・三メートル、幅七六センチ、内面の割りこみ四二センチをはかる。身は上半部と下半部の二個に分けて割りぬかれたものを接合している。全長二・七メートル、最大幅七八センチ、内法で長さ一・六二メートル、深さは二一と一八センチであり、蓋と身の組み合わせは印鑑口式である。発掘の際剝身が出土し東京国立博物館の収蔵に帰している。

この石棺は、省内では数少ない船竹形石棺であり、しかも舟身のつくりは上半部と下半部の二個を接合した特異な形式が注意される。



石棺実測図



石棺上面

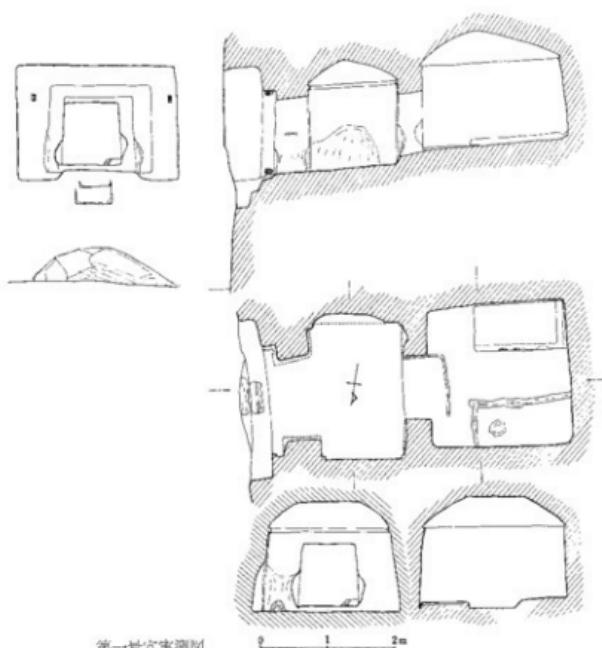


石棺侧面

岩屋寺跡古墳（横穴）

八束郡 玉湯町大字下造字岩原
昭和二三・一二・一八 史指元

玉造川下流の左岸の標高約五〇メートルの丘陵頂部に
構築する無灰質砂岩の岩室に穿つたもので、一二メートル
の開闊をもつて南北の二穴（北側なら第一号穴とする）
があり、いづれも東向きに開口している。
第一号穴は前後の複室をそなえ、天井は四角式桶形
である。奥室は西側に床体を設け、両側の屍床には轎
八センチ、高さ五センチの縁をとっている。また、前室
では意されるのは、四壁の交点および天井と四壁の境界
線が幅五・七センチ、高さ二・四センチの複帯でつくら
れていることである。横穴の全長は四・四五メートル。
奥室は異る、幅ともに二・一メートルの正方形を示す。
床面から天井までの高さ一・七メートル。前室は、奥室
よりも約一〇センチ低く、厚さ四〇センチの塊壁で奥室
と区分する。玄室の形は、長さ一・二メートル、幅一メー
トルの矩形であり、高さは一・六メートルである。
第二号穴は单室で、玄室の天井は四庄式の屋根形を示
す。半袖は北・六・八度一更を示し、全長約三・五メートル
、玄室の長さ二メートル、幅約一・七メートル、高さ
は一・九メートルである。この玄室も両側に屍床がつく
られており、また表道部には二段の切り込みがある。
いづれも右壁に穿れた横穴とはいえ、外観はあたかも
横穴式石室の開口しているのを思わせ、内部の構造も極
めて精巧につくられていてこの地方の横穴の複雑なもの
の代表的なものである。なお、この横穴がある岩壁の上
部には、岩壁を削つた石塔様の施設がある。



第一号穴実測図



前面



第一号穴窑室

玉造築山古墳
なまつら

八栗郡 玉造町大字玉造字出口・大門
昭和三六・六・一三 県史指定

玉造川の左岸、瀬原街に近い丘陵にある。

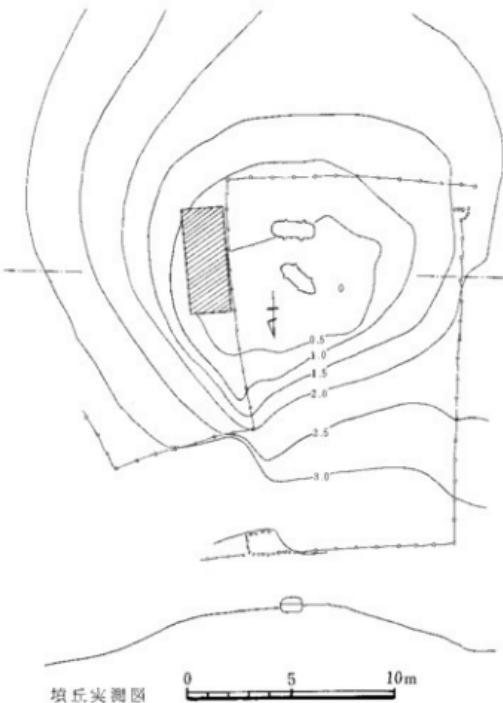
墳丘は、畠地と竹藪に囲まれてかなり變形しているが円墳である。東西往約一五メートル、高さは二・五メートルである。

江戸時代の末、安政年間に墳丘の中央部とその南側に麻灰岩を割りぬいた舟形石棺二箇が發見された。

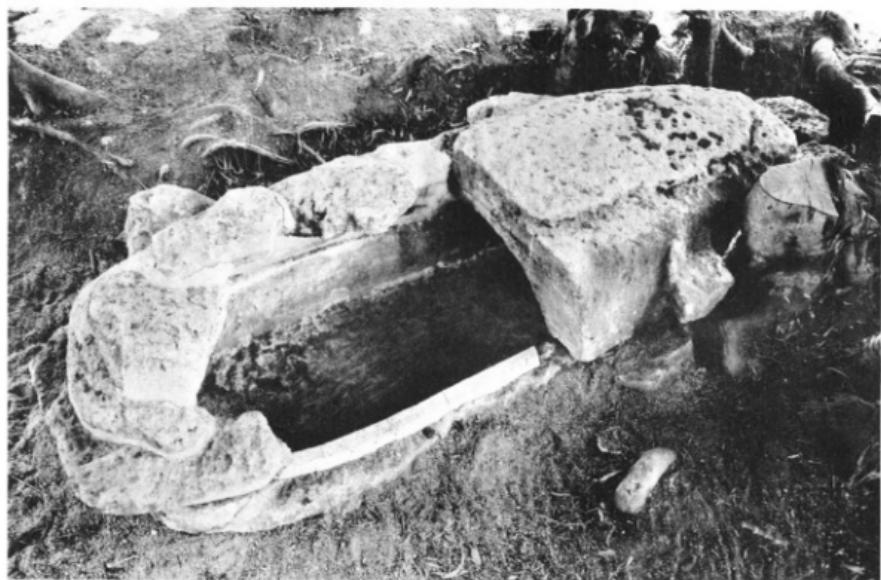
中央の棺は、瓜実形を呈し、主軸を東南—西北にして、東南側が高く五度の傾斜をもつて置かれている。また、西北側を舟のへき状に尖らせているのは、舟形石棺の特異例といえる。棺身の總長二・一（内法一・八）メートル、胸部最大幅八〇（内法四八）センチ、深さは二〇センチである。両側に二箇あて突起をもつていて、蓋は下半身を覆う。西北側が完存しているが、身と同様なつくりである。

南側の棺は、中央の棺から約一メートル離れ、六〇センチ位置に置かれて主軸はほぼ東西を示している。横邊は、中央棺のように身の一方が尖らず、また身の頭受けは印籠口ではなく平縁である。身の總長二・〇二メートル、頭部最大幅八二センチ、内法は長さ一・七メートル、頭部幅四八センチ、足部は二八センチ、深さ二〇センチを有する。蓋は足部しか残っていない。

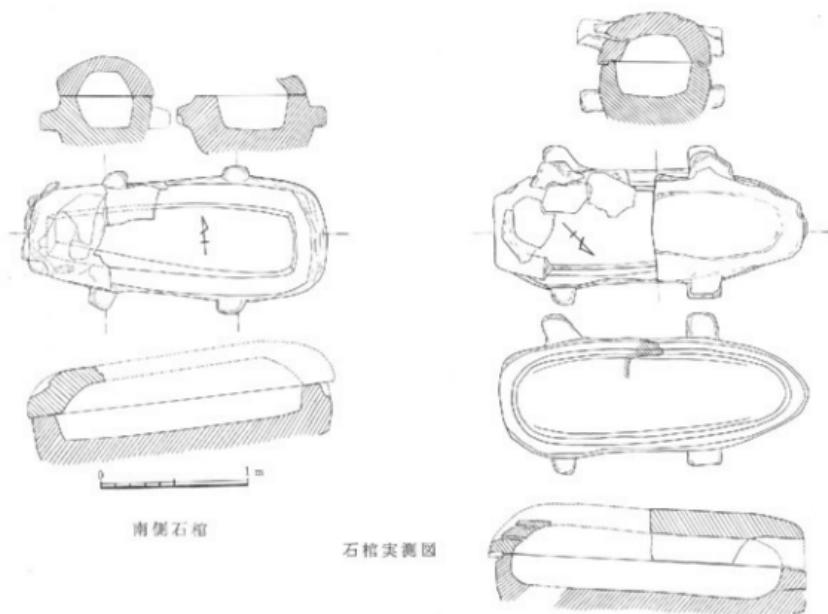
副葬品は、玉作湯舟社の古記録等から推すと、位至玉三公鏡一面・勾玉・管玉・ガラス製丸玉・小玉・白玉・鐵劍・刀・小形鏡などがあつたらしい。また先年、石棺附近の際に中央棺の近くから短甲殻片、南棺の北側に沿つて鉢を東においていた鉄鏃一束が発見された。



墳丘実測図



中央石棺



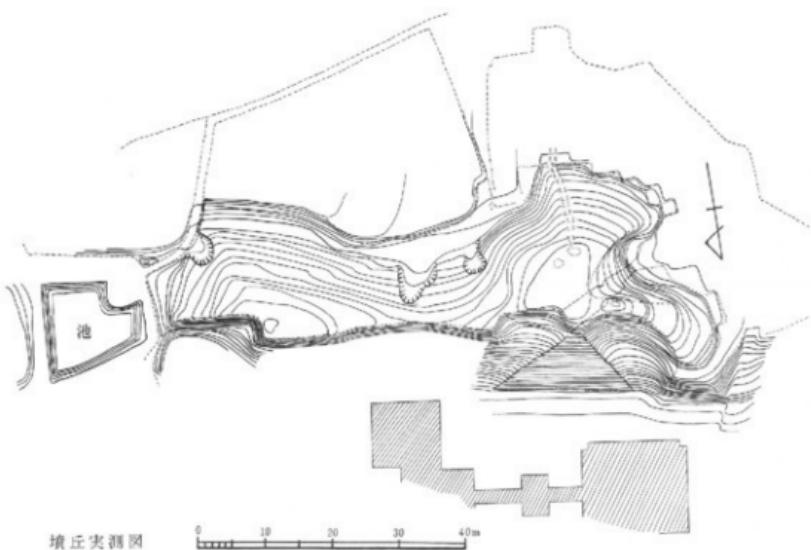
南側石棺

石棺実測図

中央石棺

今市大念寺古墳

出雲市 今市町鹽ノ浜
大正一三・一二・九 史指定



墳丘実測図

0 10 20 30 40m

今市町東南端に突出した台地上にあり、墳丘は相当削られているが、前方後円の墳形は大体保たれている。墳丘の大部分は地山で、石室付近のみ盛り土になつてゐるようである。前後の主軸八四メートル、後円部の高さ六メートルばかりであつて、内部構造の判明してゐる古墳では県下最大の規模である。墳丘周辺に埴輪田舎の残片が認められる。

内部構造は壮大な横穴式石室に家形石室二つを置くものである。石室の用材は、大形の自然石または磨石を用い、現存部の全長一二・八メートル、羨門室の幅一・二五メートル、奥壁部の幅三・一メートルの大きさである。西側壁中間部にそれぞれ二か所に階段状に張り出した石を腰き、蓋室、前室、羨室、主室の四部に仕切られている。奥壁は巨大な一枚石を用い、高さ三・五メートルある。奥室の石室は



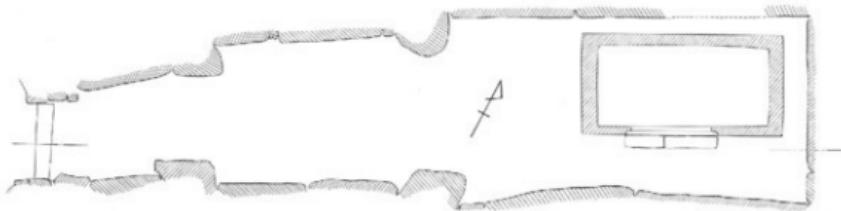
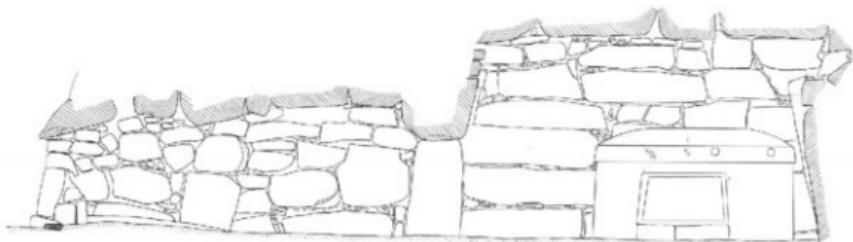
全 景

長さ三・三'四メートル、幅一・七メートル、
高さ約一・九メートル。身の高さ約一・二メー
トルである。くわらきである。腰根は内
外共に圓柱式に作り、その両半側の軒部にそ
れぞれ三個の圓形突起(腰頂の一個は欠損)
がある。身は半の側に腰邊一・三七メートル、

頂邊一・二メートル、高さ〇・七二メートル
の扇形の横口を開き、横口の外周には一
〇センチメートル内外の土をもつてくりこみ
があり、このくくりこみの上縁内側にはそれぞ
れ一個の小孔がある。横口の前面にはこれと
接つて另に長方形の切石を積だえている。前
室にあつた右棺は現存しない。William

Gowland : The Burial Mounds and
Dolmens of the Early Emperors of
Japan. はるるる。その調査當時すに蓋ふ
前壁は破壊してて、棺の内法は長さ五フィ
ート、一インチ、幅一フット五インチ、深さ
一フット四又一〇インチ、一〇分の一であり、か
つ若干割り方の荒つぱいものであると記され
ている。また同書にのせられた実測図によると
と、この小棺は組合式であり、前室のほか中
央にあつて、奥壁に向かつて左壁に近かく置
かれていったことがわかる。

この古墳の開口したのは、文政九年(一八
二六年)二月、寺誠益(工事の際であるとい
う。金環、丸玉、金銅鳳、大刀數本、槍身、
石突、斧頭、轡(けん)、鉤(くわ)、雲珠、須道器等
が出土したという記録があるが、現存するも
のに刀身残欠、槍身残欠(斧頭、轡(けん)、鉤(くわ)、
雲珠残欠(鉤(くわ))、須道器蓋
等があり、大念寺に保管されている。



石室実測図

0 1 2 3 4m



石室内部



石 棺

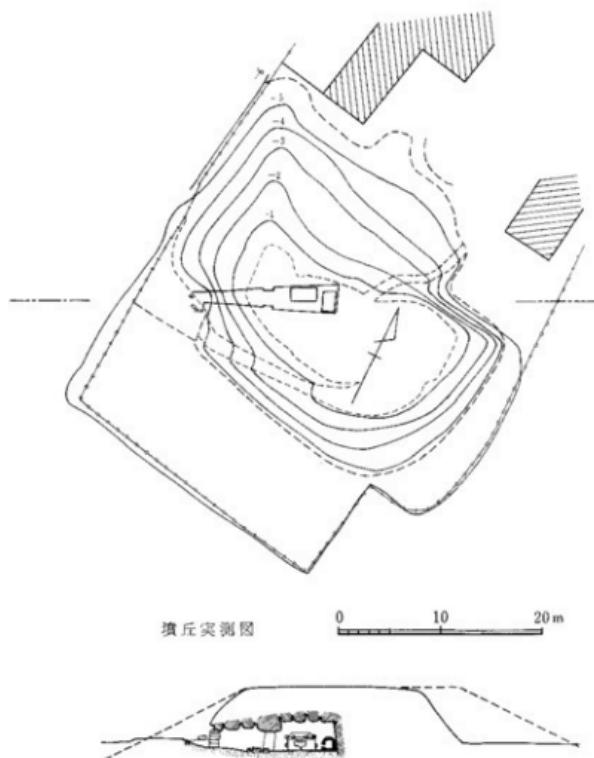


出土遺物（鐵板・鉄片）



上塙治築山古墳
かみえんや

出雲市 上塙治町 桑山
大正一三・一二・九 史指定



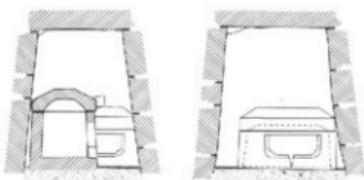
この古墳のあたりは丘陵地帯から五〇〇メートルばかり離れた、谷の平地で、現在畠と宅地になつており、これに續く水田地帯より若干高くなつてゐる。底面四二×四三メートル、高さ六・五メートルばかりの円墳で、蓋石は認められないが、埴輪田舎の破片が墳丘周辺に散在している。



全 景

内陣構造は凝灰岩の切石を積んで樋を作つた横口式家形石棺二つを置いたものである。現状では石室の長さ一四・六メートル、^{なんう}最前部の幅一・一メートル、美妻部の幅二・八メートル、奥室の高さ三メートル、誤追部の高さ二・四と二・二メートルの大きさである。奥壁と誤門の中間奥側に方柱状の切石を立てて門形を作り、その部分の床には板状の敷石を置いている。もとこの所は切石を積んで閉塞されていたという。奥室には床面に総約五センチメートルの壁を敷いている。

大小二つの石棺は共に裏室内に置かれてゐる。小棺は奥壁に接し、通道の方に向かつて横口を開いている。その長さ二・一メートル、幅一・四五メートル、高さ一・三二メートルあり、棺身はくりぬき、蓋は内外両面を西庄式に削り、平入の位置に横口がある。横口の周囲には浅いくりこみがあり、下縁中央部には排水のためのせまい溝を切りこんでいる。蓋と身の側面には粘土をこめて目張をしてい る。大棺は小棺の前方に北側壁に背面を接して置かれ、形状は大体小棺と同様であるが、その蓋側に身蓋共に各一鶴すつ、蓋の正面に二鶴、合わせて六個の円形突起があり、横口は周囲にくりこみがなく、下縁両側に直線的な丸みをつけただけの簡單な形である。大棺は長さ二・七一メートル、幅一・四五メートル、高さ一・七六メートルある。なお大小共に樋の外側の稜角は面取りがしてある。小棺の樋口くり形は地城山古墳や宝塚古墳の石棺に類例がみられ、大棺のそれは地城山古墳・百代神古墳の石床に類例がみられるが、两者は共に九州の古墳に多くみる手法である。



石棺実測図

0 1 2 3m



この古墳が発掘されたのは明治二〇年三月で、遺物の出土状況は鳥取県史(四)による。奥室の棺外に土器・鎧・槍・劍・鏡類があり、小石棺内に玉類・長刀一・短刀一・冠・土器一等があり、この小棺の墨板に馬具類がのせられ、大棺の中には円頭大刀・劍類(直刀)・土器おのの一があつたという。

現存する出土品は、金釦冠 銀環・玉類(メノウ製勾玉・水晶製丸玉・ガラス製玉・ガラス製管玉・ガラス製丸玉・ガラス製小玉)・円頭大刀・方頭大刀・槍身・鉄轡(く轡)・鐵金具・雲珠および辻金具・劍鈴・須恵器等であつて、出雲市教育委員会から県立博物館に寄託展示されている。



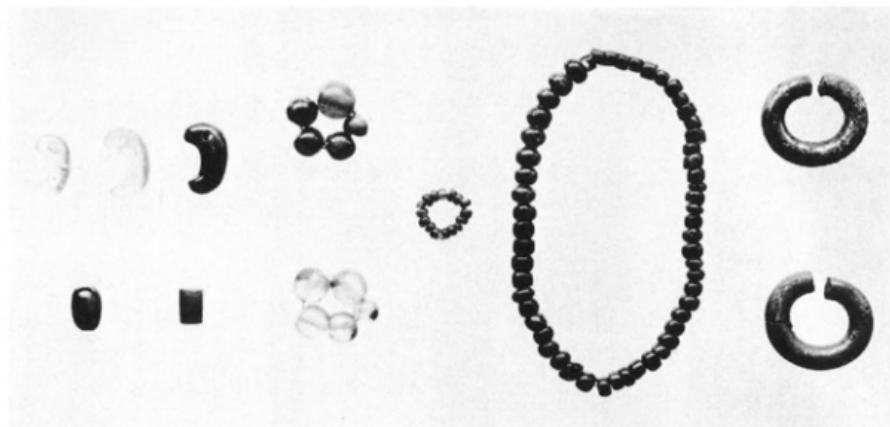
石室内部



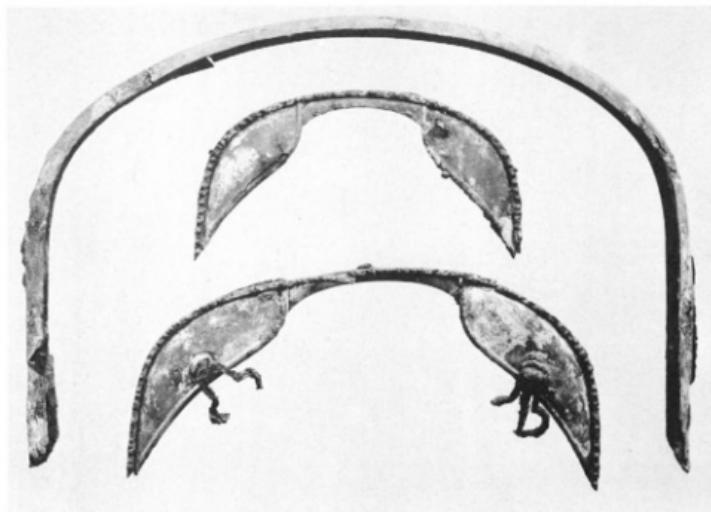
金 銅 冠



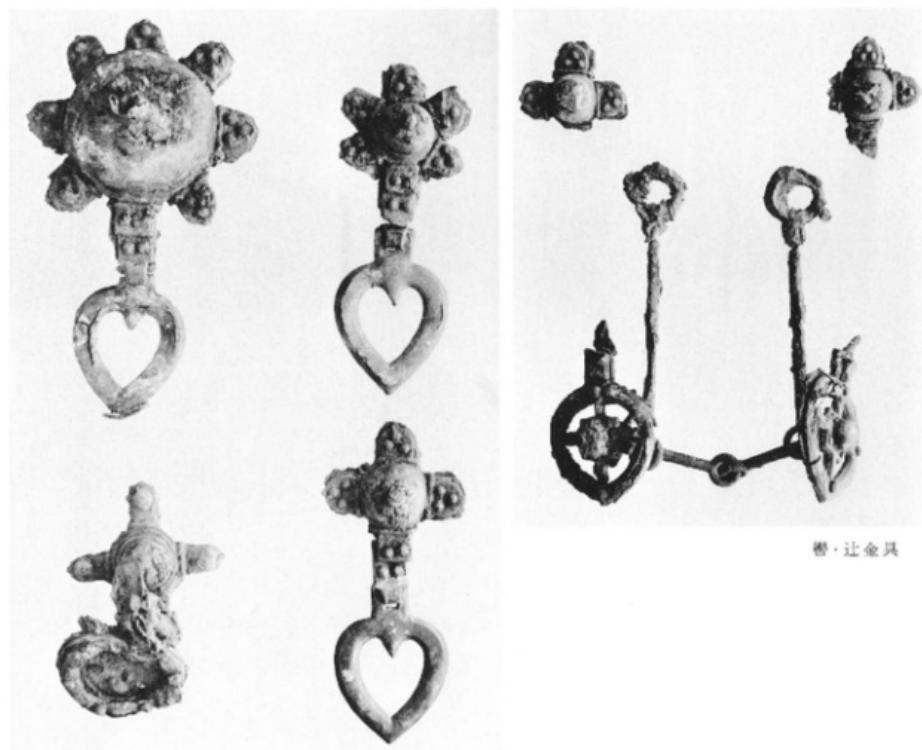
銅裝圓頭大刀



銀珠・玉 簪



被金具



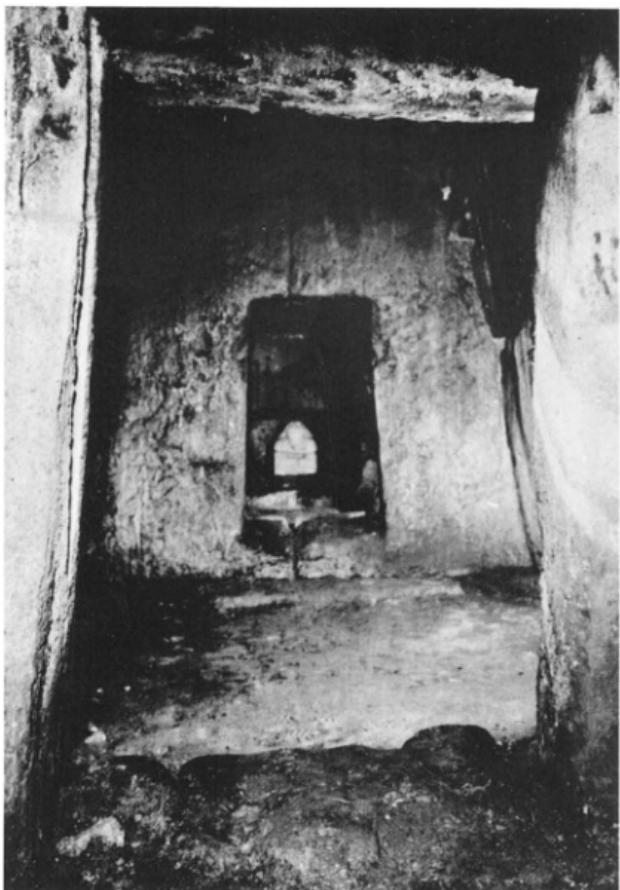
卷・辻金具

雲珠と杏葉

上塙治地藏山古墳

出雲市 上塙治町池田
大正一三・一二・九 史指定

丘陵の腰に作つた円墳で、直径約一五メートル、高さ約五メートルあり、周囲から削つたためか、やや横円形を呈する。

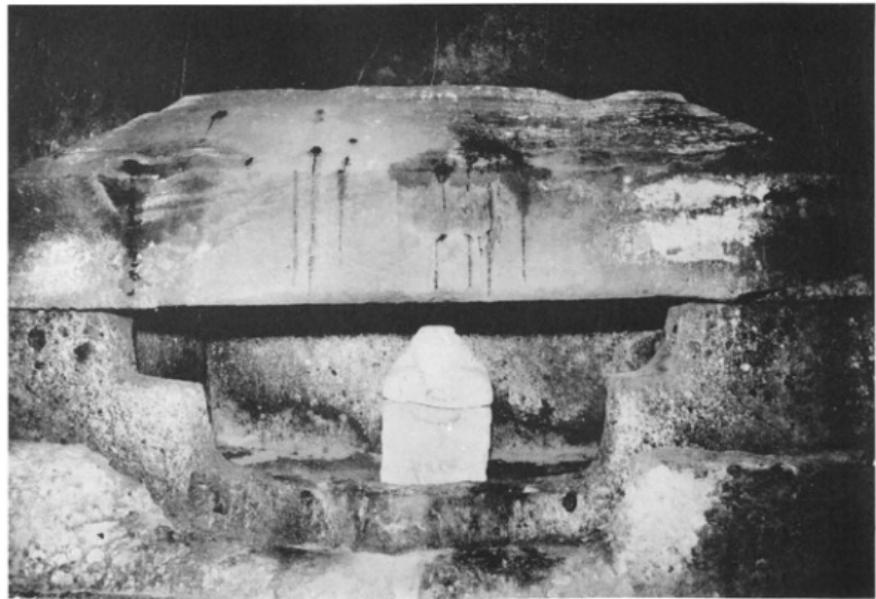


石室内部

内部構造は切石で作った横穴式石室の中に、くりぬきの方形形石棺と有縁石床とを置くものである。石室は奥室・前室・調道の三部に区分切られており、全長約九メートルある。奥室は奥と両側の三壁および天井をおのの一枚の切石で組み、前壁の中央に方形の口があつて前室に通する。前室側壁は数個の大形切石を用い、後退部との間には両側に柱状の石を置き、その上に一段低く石を積んだれている。後退部側壁も切石で作られている。石棺は奥壁に接し、横口を前方に向む。その前に接して縁のある石床を置いている。石棺は上塙治築山古墳の小石棺に類似したタイプであるが、横口の周辺のくりこみはない。石床は前後同様にくり形がある。



全 景



石棺と石床

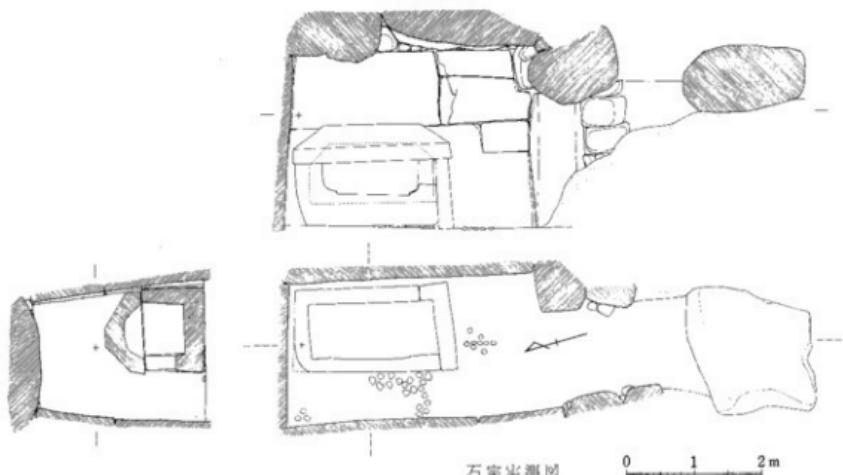
宝塚古墳

出雲市下古連町西田
昭和六・一一・二六 史指定

妙見寺山の西北約五〇〇メートルの水田中にあるが、封土はほとんど失なわれ、石室の上部が露出している。石室の床は周囲の水田面よりやや低くなっている。発掘年代は明らかでない。墳丘周辺に埴輪陶器の破片が認められる。

内部構造はほぼ南北西向きに開口した一種の片袖形の横穴式石室に横口式家形石棺を置いたものである。玄室の礎は比較的大形の切石で作られ、幅二・一メートル、奥行三・七メートル、高さ二・六メートルの大きさである。底部には幅一〇センチメートル程度の端平な礎を敷いている。

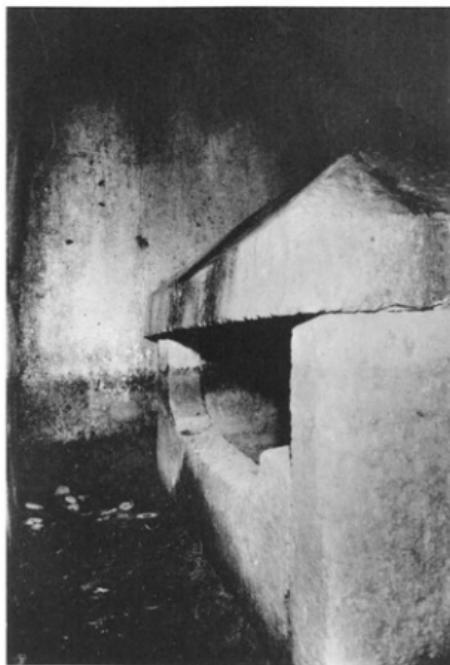
玄室の東壁に接して西向きに石棺が置かれているが、棺身はくりぬきで両側のみ別の石で補つたものである。棺蓋は四注式櫛楕形で、その半の方に横口がある。横口の部分は左右非対称であるが、横口のくり形は上古治築山古墳の小石棺や地蔵山古墳の石棺と類似した手法をとり、縦に面取りをしている。なお、石棺は長さ二・二メートル、兩側の幅一・三メートル、北側の巾一・二メートル、高さ一・五メートルの大きさである。



石室実測図



全 景



石室内部

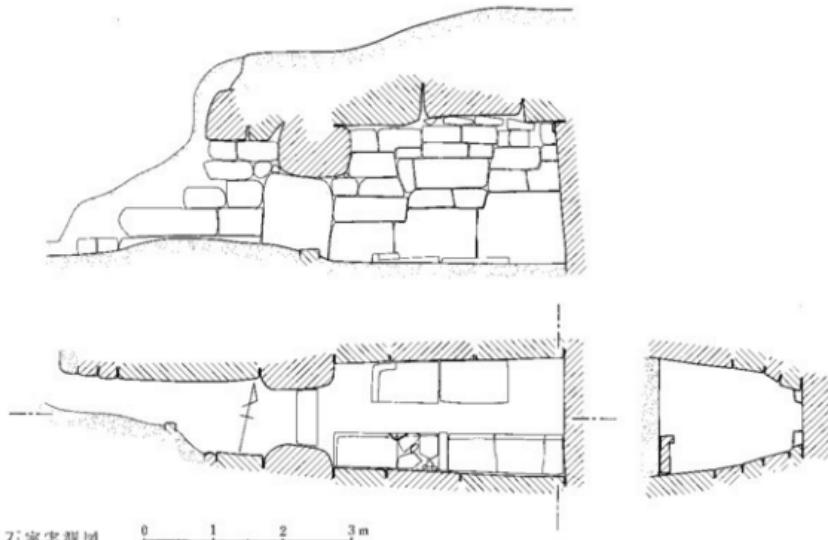
放
れ
山
古
墳

出雲市 古志町新宮
昭和三四・九・一 県史指定

妙高寺山の東端に接した比高約一〇メートルの台地上にある。正面からみると相当高い墳丘のようであるが、当地の車上に近く作られ、墳丘の上部と周囲が円錐状に整えられた程度のものである。

内部構造は切石で作つた横穴式石室の中に三人分の石床を設けたものである。玄室は奥壁部の市一・セーメートル・長さ三・五五メートル、高さ二・八メートルの大きさである。壁と石床はいずれも凝灰岩であるが、端壁は一枚の切石を立て、両側壁は長方形の切石を雖然と積んでいる。北側壁にそい、部分低い縁をつけた石床があり、南側壁に接しても同様の石床があり、その中間に幅のせまい石を立てて、これを二人分に仕切つている。玄室と羨道の間には両側に方柱状の石を立て、その上には圓形の石をのせて門形を作り、底に細い切石を置いて境界としている。この部分がうすい凝灰岩切石で覆され、羨道部には大形巣石様の石と粘土がつまつていたという。

石室の発掘は大正年間であるが、山下品は頭骨、大刀一・金綱装小刀残欠・銀装刀残欠・刀子残欠三・鉄鏃(尖根)多數・鐵地金綱装香炉三・鐵地金綱装雲珠及び辻金具四・脚二(一つは鉄地金綱張綱板のあるもの)・金環二・須恵器(腹付盞一・提瓶一・高杯一・低脚付小形長颈甕二・小形甕二・蓋杯若干)等で、県立博物館に寄託展示されている。



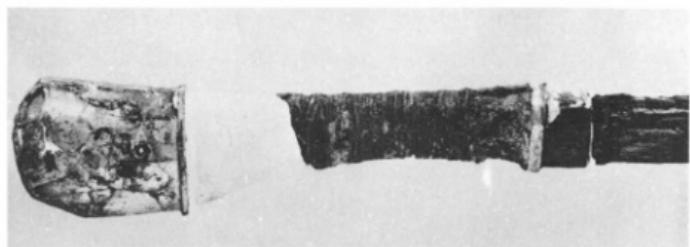
石室実測図



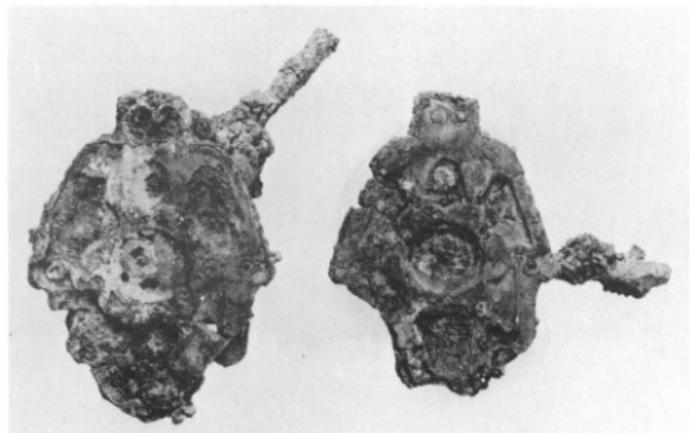
全 景



石 室 内 部



頭椎大刀



巒





遠 景

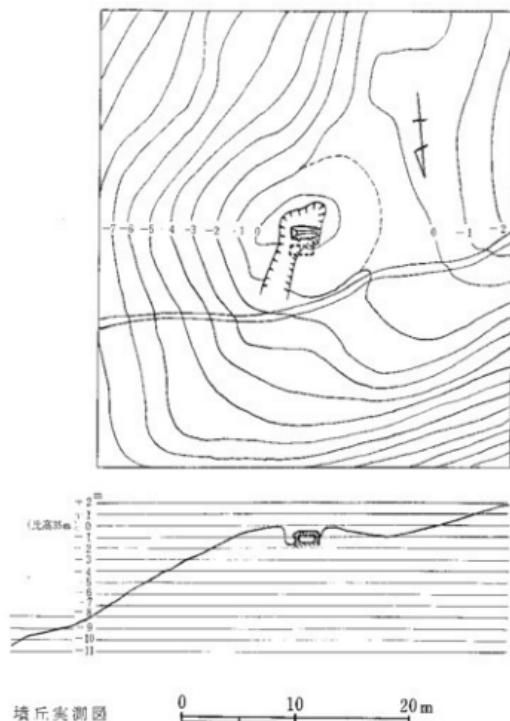
上島
古 墳

平田市 国富町上島
昭和三一・七・二七 史蹟走

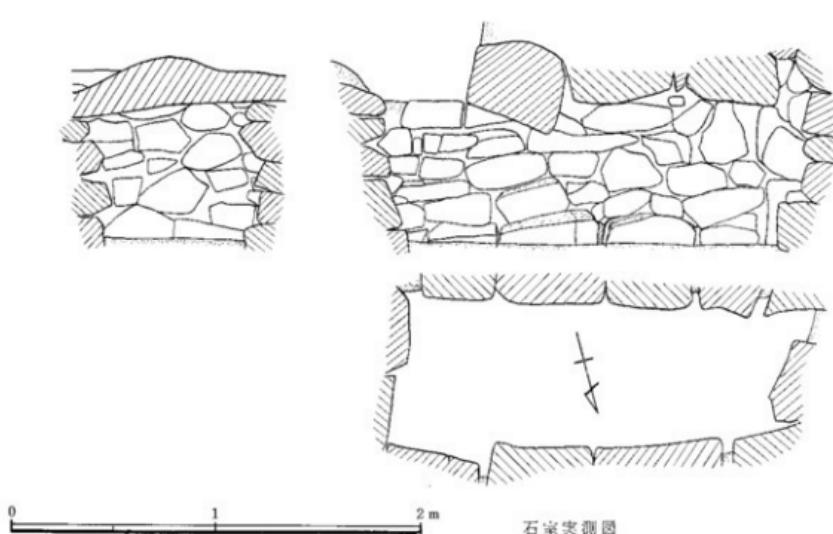
比高約三五メートルという相当高い山腹のかなり急斜面に作られている。直徑約一五メートル、高さ約二メートルの円墳で、平野に面する側は悠然と形が整えられているが、裏側つまり山に続く方はほとんど人工を加えていない。埴輪や蓋石はないが、埴輪尾辺から須恵器・土器器が相当発見されている。

内部構造は室形石棺を直接土中に埋め、それと平行して小さい腰式石室を設けたものである。石棺は湖灰岩を用いたくりぬきの室形であつて、棺蓋は一方の便をのこして三万が斜面に削られている。棺蓋の平には一個に二種の矩形の突起があり、反対側にも一個だけ突起らしい痕跡をのこしている。棺身には一方の短壁に円形突起がある。棺身は内法で長さ一・八三メートル、幅〇・六九メートルで、側壁が中ぶくれとなり、底部が上端よりやや広くなつてゐる。石室の四壁は主に三〇×〇・〇センチメートルの長さの自然石や型石を積んで作られ、四枚の石を用いて蓋をしている。長さは一・八五メートル、幅は更側で〇・七メートル、西側で〇・六メートル、高さは〇・七メートル内外である。床部は土であるが、別にためた様子はない。この床土に石棺と同質の石の小片が相当混じていて、石棺・石室が同時に設けられたものと推察される。この古墳は昭和二四年五月、開墾作業中に発見されたものであるが、石棺内には人骨がほぼ完全にのこつており、陪葬品はその両側にあって、ほぼ左右均衡の位置をとつていた。まず、右側の棺壓に刃を接して直刀が尖端を足の方に向けて置かれ、その柄のあたりに六個の金銅製金具・鉄製金具・小形刀子があつた。また、左側の位置に大形刀子・頭部右側に銀鏡一個、胸部右側に鏡面を上にして五鉛鏡、左手の位置に鎧鏡が置かれていた。玉類は頭の周囲にガラス製

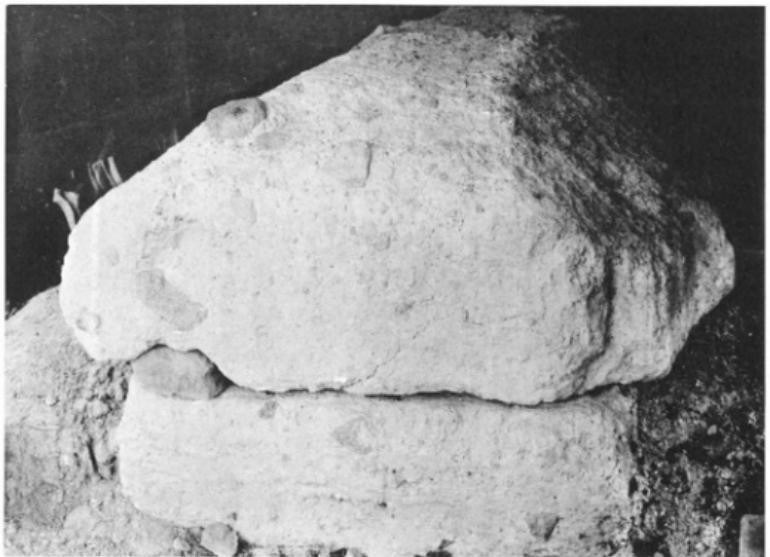
小玉が散乱し、左右両脇から手首の位置にメノウ製管玉とガラス製小玉との
つていた。また、両足頭をとりましてガラス製丸玉があり、着用のまま埋葬
されたことが明瞭に認められた。なお、随葬の両側胸に三組の須恵器蓋環が置
かれていた。石室には、馬具類（鞍金具・轡金具・雲母・吉葉等）・矢（籠は
四〇×五〇本あり、いずれも單純な尖頭で、籠は竹が用いられている。）・石
塗壁がおさめられていた。壺は鉄地金網張の鏡板のあるものと、單純な圓田形
鏡全ついたものとがあるが、十字形鏡板は誤田市めんぐる古墳出土品と同形
式であることが注目される。呑葉は鉄地金網張の結紐状（日田刺繍形）のも
のと、鉄製心葉形のものとがある。



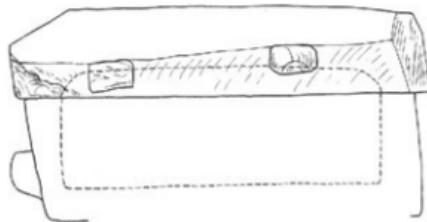
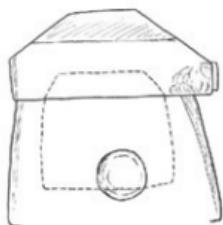
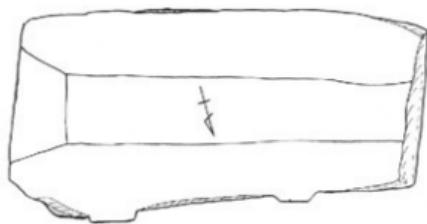
墳丘実測図



石室実測図



石棺

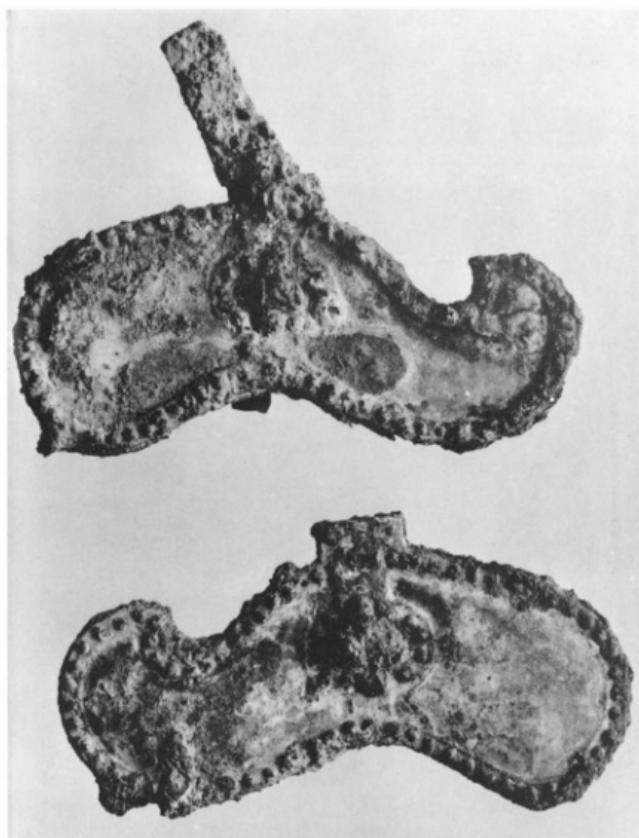


石棺実測図

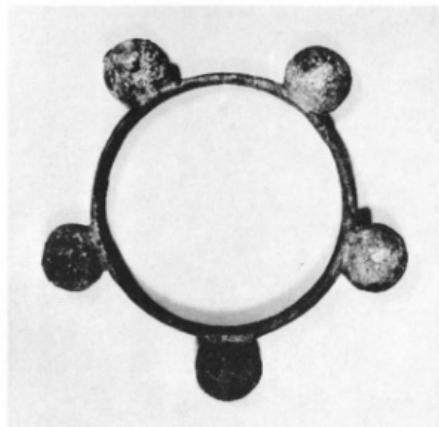
0 1 2m



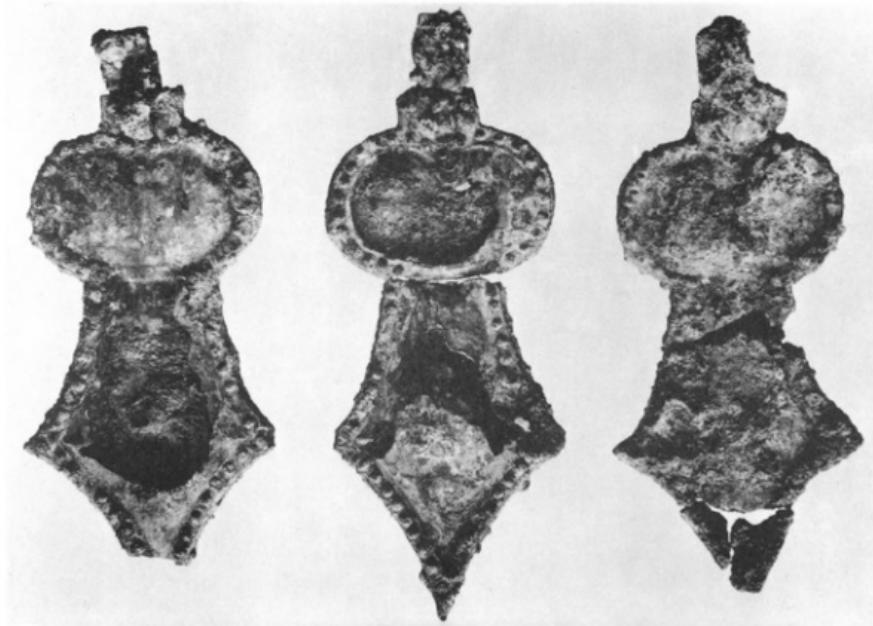
鈴 鏡



鈴



鈴 銅



杏 菜



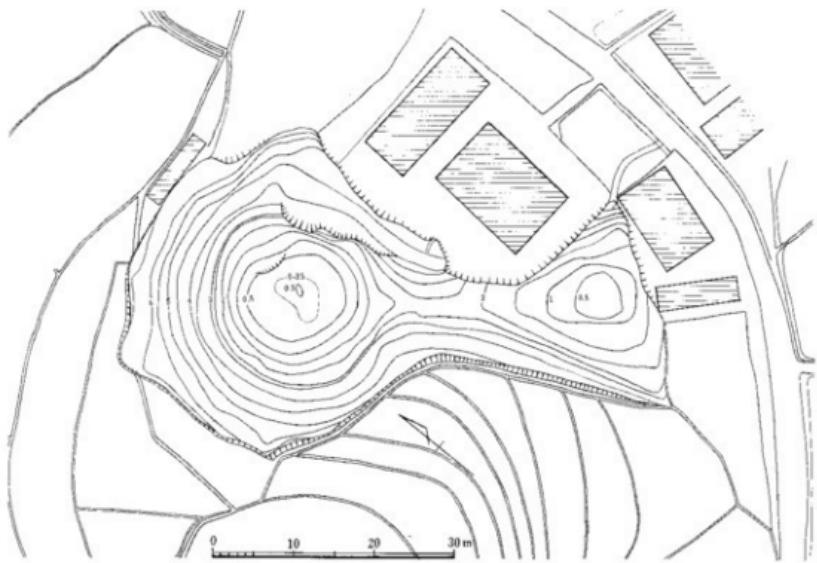
全　景

周[†]
布[‡]
古
墳

浜田市大字治和三宅
昭和一一・一二・一六 史指定

山陰本線周布駅の西南方約半キロの所にある前方後円墳である。
附近の環境は、周布川によつて形成された冲積原野の西端部に、米
ガ辻山から派生する一条の支丘が台地状をなしてつき出している。

周布古墳は、この台地の突端に築かれており、標高は四〇メートル、沖
積平原との比高は三〇メートルばかりである。従つて、この古墳は東
北方に石見第二の水田地帯を望み、西北方は眼近かに日本海を抱えた
景勝の地に置かれている。



墳丘実測図

墳丘は、台地の西北隅を一部切断して前方部を設け、平野に面した側に後円部をおいている。玉體は、南北縦よりも三七度東にふれいる。

現在、墳丘の周囲は水田とためるために削られており、ことに東側と南方部の先端は著しい。現存する墳丘の全長は約六・六メートル、後円部は約二・五メートルである。前方部は、くびれ部の幅一八メートル、先端はかなり開いて一四・五メートルをはかる。高さは、後円部が約五・七五メートル、前方部はそれよりもわずか二・七センチほど低い。なお、残存する前方部の端から道路のある處までの距離は一七メートルである。

次に、墳丘の後内部において、基底部より二メートルの高さで一段を造り、墳頂部には二×一〇・五メートルの半圓形がみられる。このほか、墳丘の斜面には葺石を留き、また最鈴円頂も立てられたらしい、所々にその破片が散在している。

前方部が削られているので、元の敷面は明確でないが、測量図によつて復元すれば次のようになる。すなわち、全長七・四メートル、後円部の直径は必ずしも、前方部の長さ三七・四メートル、先端の幅は三一メートル前後と思われ、したがつて復元した前方部の端を道路のある切削部との距離は約一〇メートルとなる。また、この道路から上の水田面までの高さは二・メートルある。したがつて、古墳築造当初は幅約一〇メートル、長さ約三メートル以上の範囲を深さ約二メートル前後掘りくぼめて自然丘と墳頂を區したと思われる。

以上のように、この古墳は滋賀市のスクモ原古墳とともに石見における古墳の主座を占める完備された前方後円墳である。

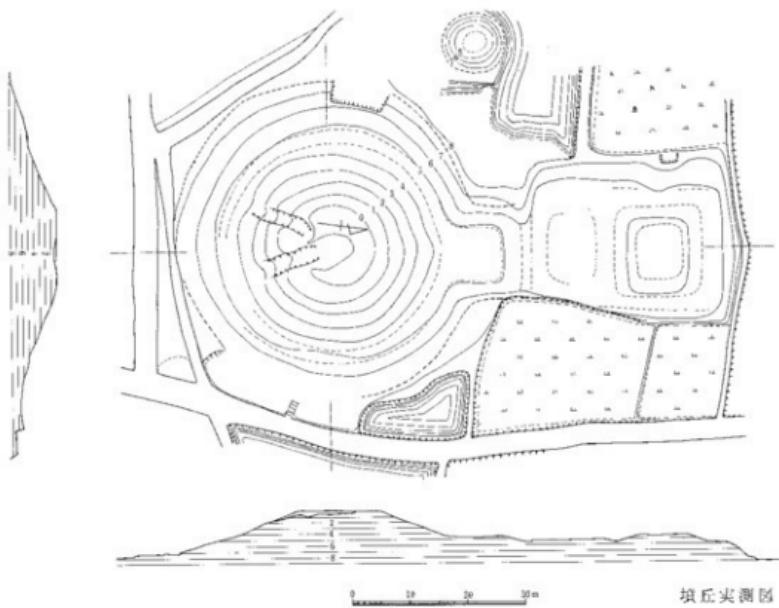
なお、同布古墳の東北方約一〇〇メートルの所にめんぐる古墳跡がある。封土はすでに失われているが、もとは円墳であつたらしい。内部構造は、西向きの横穴式石室で昭和二四年二月に優秀な子持美守の須恵器、鏡、馬具などの副葬品が発見された。これらは、現在鷹取小学校に保管されて、県の文化財に指定され、本図集の第一集に紹介されている。



全 景

スケモ塚古墳

益田市 久城町字須久茂塚
昭和一六・一一・一三 史指定



填丘実測図

古墳は山陰本線の石見郡田原と石見郡田駅のほぼ中間にある標高四〇・二〇メートルの独立丘陵の西寄りに位置している。墳丘は前方後円形を示し、前方部を北側に向けた主軸は、南北線よりも八度西に傾いている。

後円部の西北に約一〇メートル離れて小円墳一基がある。直径約一メートル、高さは三メートル余りである。

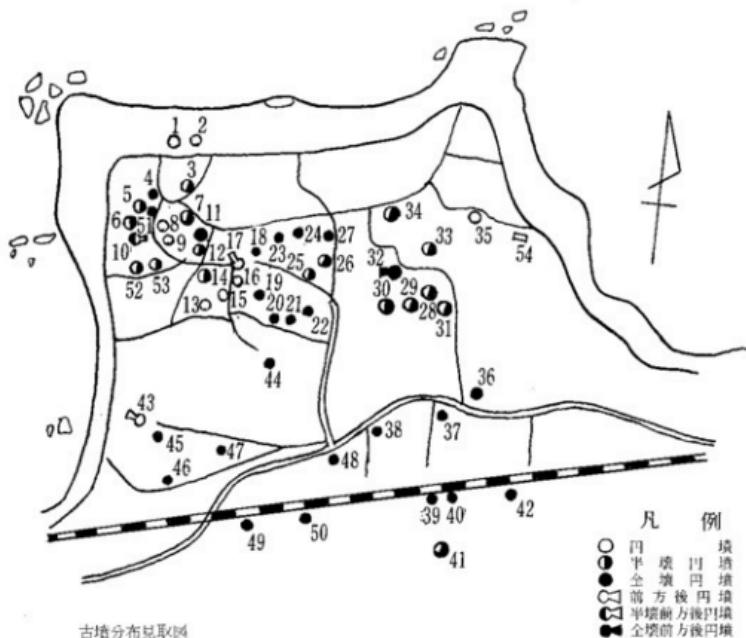
主墳は、全長約一〇〇メートル、後円部の直徑五四・五七メートル。前方部くびれの幅一九メートル、先端は約一九メートルである。高さは後円部が七メートル、前方部はそれを約四・五メートル低い。

全体に柄輪式に似た前方後円形を示すが、後円部の頂上に約一メートル前後の平坦面があり、斜面の中程に一段を造っている。この段は、前方部に向かつて一五×一七メートルの大きさで方形に張り出しており、あたかも内濠に造り出しの附屬したような形状を示している。これに対して前方部は、一辺の長さ一〇×一メートルの方墳状を示している。従つてこの前方後円墳は、造り出しのある大円墳に方墳が隣接するがごとき感をあたえる。外部施設として、後円部に墓石があり、埴輪円筒を二段にめぐらすものである。

かぶつに本古墳は、石見では最大の規模をもち、しかも元備された前方後円墳である。

鶴の鼻古墳群

益田市 遠田字塩穴原・鶴の鼻
附和三三・八・一 県史指定



古墳分布見取図

山陰本線石見津駅の四方約一キロの所に、日本海へ半島状につき出した標高四〇メートル余りの台地がある。鶴の鼻古墳群はこの台地上と汀綫に近く分布する縦計れ〇基余りで構成されている。そのうち、現存するもの三基で他は破壊された。

この古墳群は、古墳の分布状態から次の四支群に分けられる。すなわち、鶴の鼻支群（五基（円墳のみ、現存するもの七基）、山門支群 一基（現存するもの四基七基、前方後円墳一基）、山伏堂支群 一二基（現存するもの円墳二基、前方後円墳一基）の各支群である。

このうち史跡に指定されているのは、鶴の鼻地区の保林に分布する十九基の円墳と前方後円墳である。

円墳は、直径一〇メートル前後、高さ二〜二メートルの小規模なものが多い。内部構造は、海岸の藍石と花崗岩の割石を使用した横穴式石室である。プランは、現存するものについていえば、片袖形で玄室は石材を持ち送り式に積み上げている。全長五・六メートル、幅一・五メートル、高さ一メートル前後の一基。

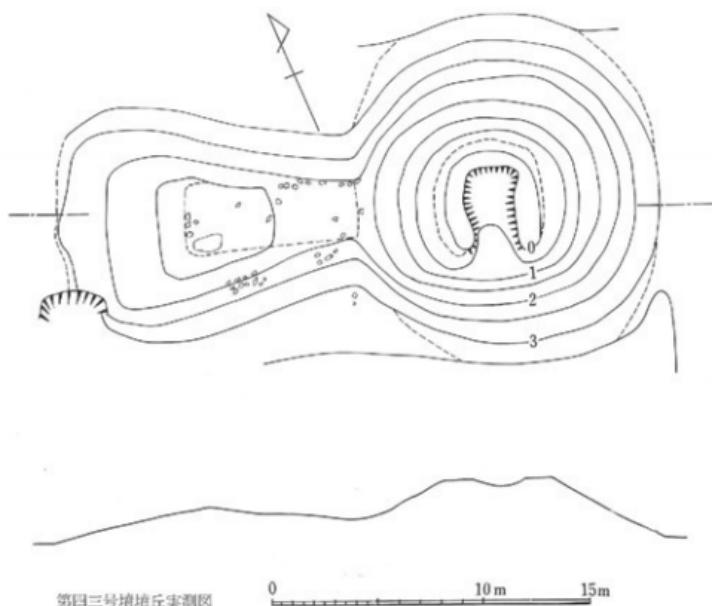
前方後円墳は、第四三号墳のように全長二〇メートル、後円部の高さ二・三メートルの小規模なものであり、内部構造も円墳と同じものようである。

副葬品は、古く検出されたものほか、大正一年の山陰鉄道開設工事以来、近年まで多数のものが発見されたが、そのほとんどは出土古墳の判明しないものである。その主なものは、土器類、瓦環、瓦などの中身具類、大刀・鉢輪の武器類のほかに滑石製鏡等があり、優秀な單面彫式の環形もある。

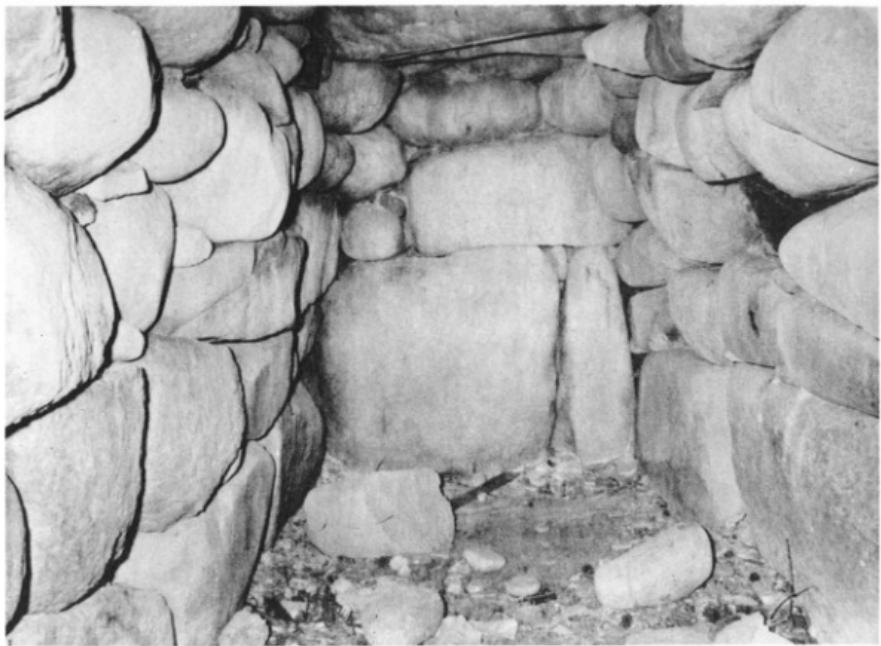
以上、この古墳群は石上では最も規模の大きな古墳群であり、しかも



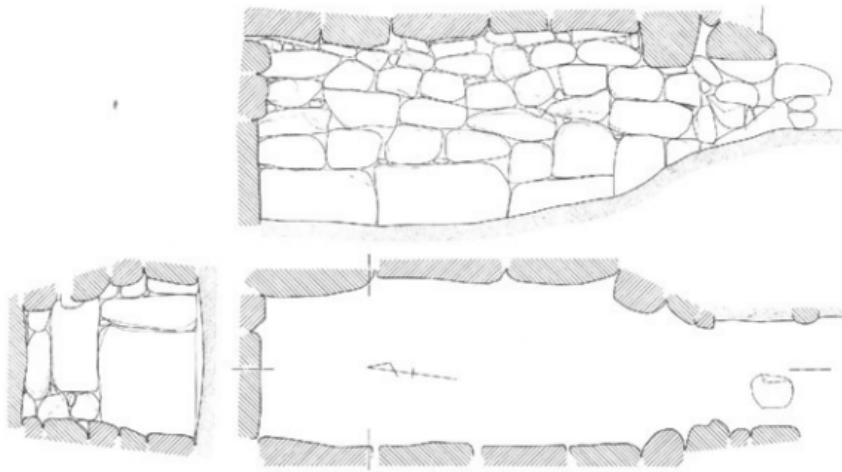
墳丘



第三号墳墳丘実測図



第八号填石室内部



第八号填石室实测图



環頭大刀柄頭



須惠器

主要文獻

佐大講武員塚
「神武村誌」昭和三〇。山本清「西山陰の繩文式文化」（島根大學山陰文化研究紀要一）昭和二六。

サルガノ墓溝窓住居跡
佐々木謙・小林行雄「出雲國森山村崎ヶ鼻洞窟及び船坂山洞窟遺跡」（考古学八の一〇）昭和二二。

椎現山洞窟住居跡
椎現山洞窟住居跡
猪目瀬遺物包覆層
猪目瀬遺物包覆層

遠山古墳
大谷從一・大國一雄・油田次郎「出雲國廣口瀬穴道跡調査報告（人類学）」昭和一〇。（昭和一四）

森良成「出雲國能義郡荒尾村出土の遺物について」（考古学雑誌二九の一〇）昭和一四。山木清「出雲國における方形墳と前方後方墳について」（島根大學論集一）昭和二六。

岩舟古墳
鶴原木治「出雲に於ける特殊古墳 中ノ下」（考古学雑誌二一）の六一の二。

森良成「出雲國能義郡荒尾村出土の遺物について」（考古学雑誌二九の一〇）昭和一四。山木清「出雲國における方形墳と前方後方墳について」（島根大學論集一）昭和二六。

遠山古墳
大谷從一・大國一雄・油田次郎「出雲國廣口瀬穴道跡調査報告（人類学）」昭和一〇。（昭和一四）

山代二子塚
「島根縣史四」大正一四。山本清 前掲文

山代方墳
山木清 前掲文

大庭鷄塚
「島根縣史四」大正一四。山木清 前掲文

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。『島根縣史四』

古天神古墳

鶴原木治「山若に於ける特殊古墳 上」（考古学雑誌九の三）大正七。高橋健吉「出雲國八束郡大草古天神山古墳発掘報告」（同九の五）大正八。山本清「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」（島根大學論集六）昭和三。

瀬井原古墳
鳥取縣教育委員會「瀬井原古墳調査報告」昭和三七。

金錯古墳群
山本清「山若園における方形墳と前方後方墳について」

丹花庵古墳
鶴原木治「出雲八束郡の一契跡古墳」（歴史と地理二六の三）昭和五。「鳥取縣史四」。山本清 前掲文

德澤塚古墳
「山若上代毛作遺物の研究」（京都大學考古學研究報告一〇）昭和二。

岩屋塚跡古墳（横穴） 同前
玉造梁山古墳 同前。「鳥取縣史四」

今市大愈寺古墳
鶴原木治「山若に於ける特殊古墳 中ノ上」（考古学雑誌九の五）大正八。

「島根縣史四」
上塙治篠山古墳 鶴原木治 前掲文。「鳥取縣史四」。『玉造市誌』昭和二六。

上塙治地篠山古墳 鶴原木治 前掲文

宝塚古墳 梅原木治「丹波國南桑田郡藤村の古墳」

放れ山古墳 「出雲市誌」

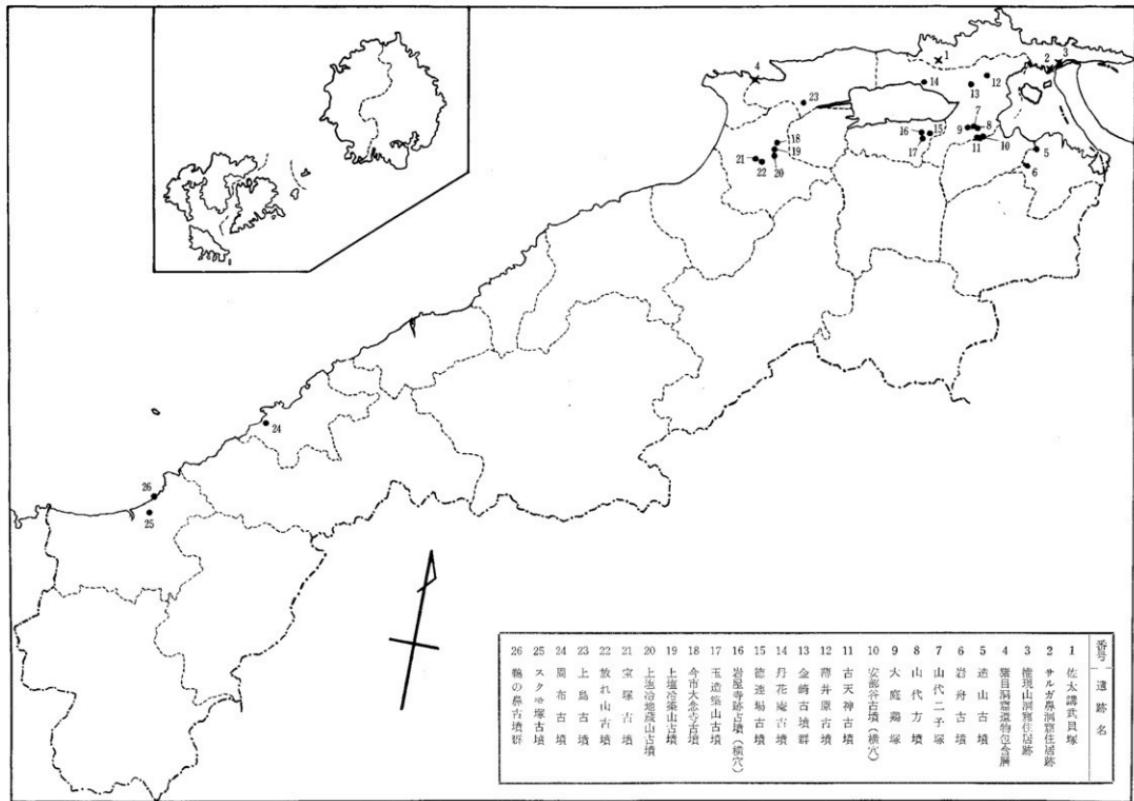
上島古墳 池田滿雄「出雲上島古墳調査報告」（古民文化研究一〇）昭和二九。

周布古墳
鶴原木治「周布村三宅の瓢形墳」（島根縣史頃名勝天然記念物調査報告七）昭和一〇。

後藤成四郎「安部谷の古墳」（島根縣史頃名勝天然記念物調査報告五）昭和一八。山本清「横穴の形式と時期について」（島根大學論集一）昭和二七。

古天神古墳
鶴原木治「山若に於ける特殊古墳 上」（考古学雑誌九の三）大正七。高橋

指定遺跡分布図



発行
行

昭和三十八年三月二十五日
西元一九六三年三月二十一日

島根の文化財 第三集

編集発行 島根県教育委員会
印刷 京都株式会社鏡利堂